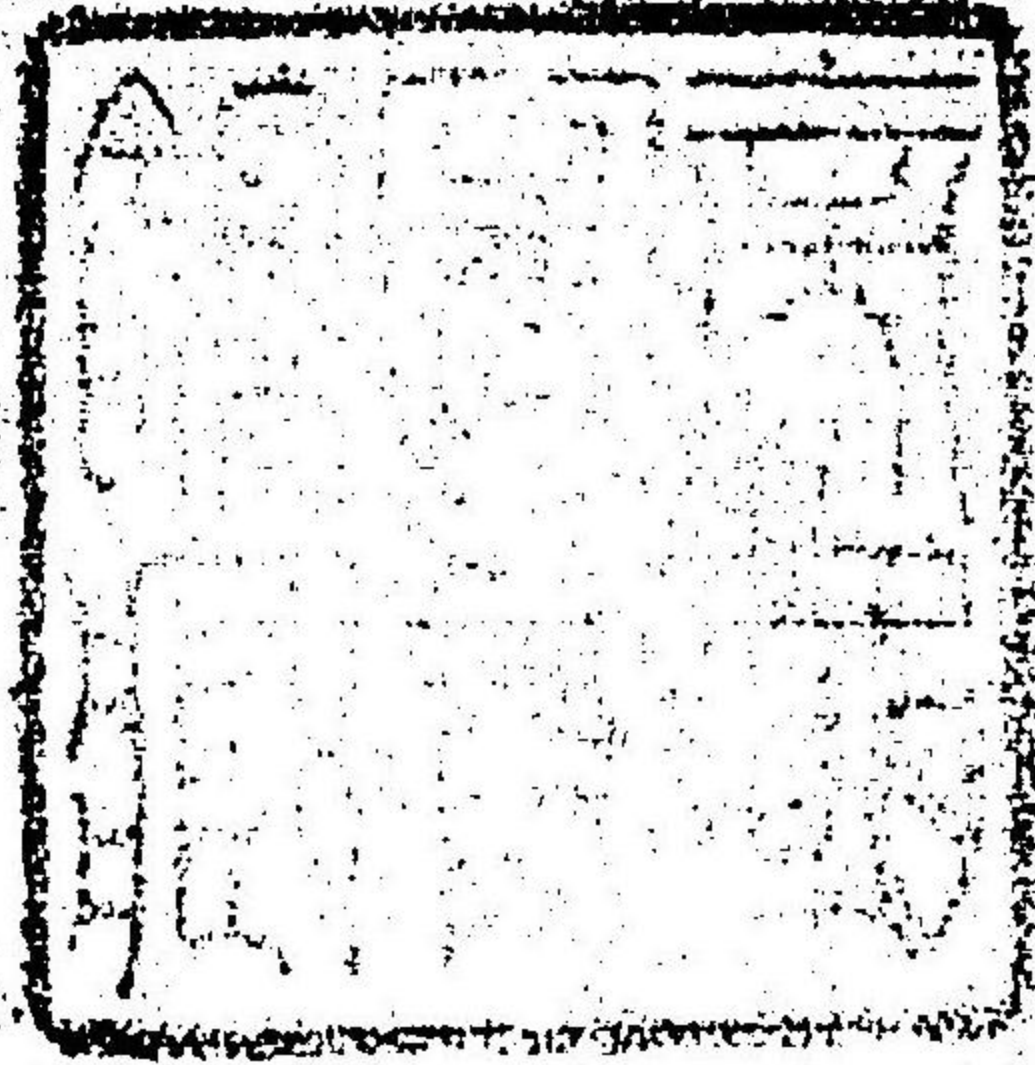
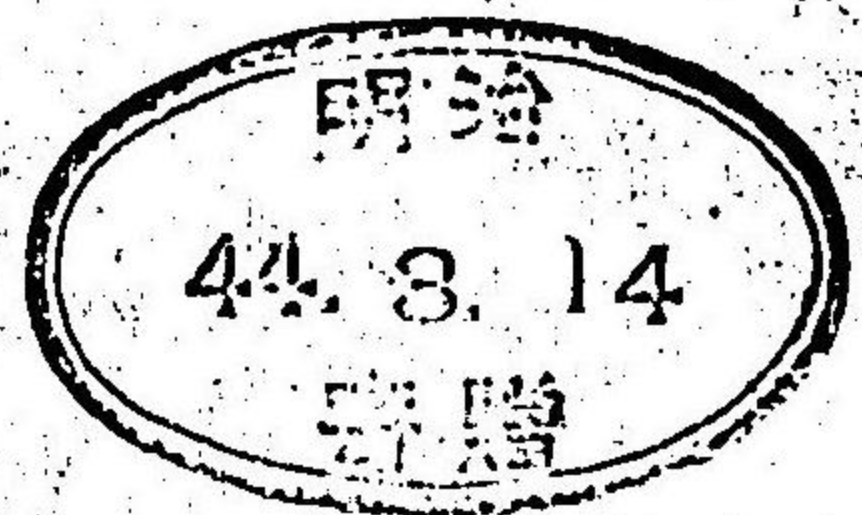


68-71



年二十三にして、其の夫を失ひ、才貌の  
艷美を以てして、屢々再醮を勧めらるゝも  
應ぜず、心細き親一人子一人の境界に伴ふ  
一切の苦楚を替りて、而かも曾て一たびも  
其の持する所を改めず、斯くて當時取りて  
僅に三つになれる著者を愛育して、其居此  
に三十三年に及べり

わが最愛の母上に  
此のほかなき小冊子をさし奉る



自序に代ふる序

著者は、此書の序にと、數日の推敲を経て、一長篇を草し、會心の作だ、痛快の文だらうと言ひつゝ、予に示した著者一家の筆鋒銳利を極めて痛快實に其自贊する所に負かないが、併し此は罷したまへと、遂に著者が折角の苦辛を水泡に歸せしめた。予は其の痛快を愛するの餘、痛快に過ぎたるを惡んだのである。予は酒を愛して、醉を厭ふものである。無理である。此の無理を聴いて、會心の文を爐火に投じた著者の雅量は、甚だ嬉しい。去れど、此の卷頭より痛快會心の大文字を奪つて、此の含糊の囁語を陳ぬるのは、讀者に對して寔に氣の毒。蓋し予が婆心も亦た過ぎた。

四十二年十二月

澁川玄耳

### 第七版の序

拙き一小冊子が、端なく大方の高顧を辱うし、上梓の後幾はくもな  
くして、版を重ねること數次、舊版磨滅又用ふべからざるに至れるを  
以て、乃ち此に全部の改版を行うて、其の第七版を發行す。

改版を機として、附録の英文七章を削り、巻中の挿畫一切を削り、  
之に代ふるに「半球周遊」中の「レムの里」及「續レムの里」二篇を加  
へ、新に多少の改竄修正を文字と順序との上に施せり。其の他に至つ  
ては則ち、舊裝依然たる醜面皮を、七たびわが宏量なる讀者の前に曝  
すに過ぎず。著者の且つ感謝し、且つ恐懼する所也

明治四十二年十月十七日大森の僑居に於て

楚人冠 杉村廣太郎識

此の書は明治四十年の春伏見宮殿下が御渡英に際し、之が通信の任務を兼ねて、二三社用を辨せんが爲に、著者が朝日新聞特派員として倫敦に出張したる時の記事なり。

例言

- 一、此の書は明治四十年の春伏見宮殿下が御渡英に際し、之が通信の任務を兼ねて、二三社用を辨せんが爲に、著者が朝日新聞特派員として倫敦に出張したる時の記事なり。
- 二、題して「大英遊記」といふと雖も、英國に關係なき往復途中の記事をも收めたり、當然の順序と信じたるに由る。
- 三、旅行中に草したるものは、章の末尾に起草の時日と場所との記入あり、其の之なきものは、すべて社に歸りて後に成れるものなり。

# 大英游記目次

## 前記—露獨佛

小引	一
日本海	二
浦潮斯德	二
浦潮より露都	四
一七(二八) 三(九) 四(一〇) 五(一〇) 六(一一) 七(一二) 八(一三) 九(一四) 十(一五) 十一(一六) 十二(一六) 十三(一七) 十四(一八)	(七一—八)
滿洲里停車場	一八
露國議會を見る	一八
客舎閑語	二三
目次	二九

目次

露都より伯林……………三三

伯林瞥見記……………三八

伯林より巴里……………四四

巴里日記……………四七

本記英

隨輿記……………(五一—七六)

大使官を迎ふ……………五一

倫敦市の歡迎……………五六

觀兵式を觀ざる記……………六五

倫敦小品

ホーツマス……………(七〇—七六)

一(七〇) 二(七三) 三(七六)

夜會の歸り……………(七七—八二)

カート、ホース、ショー……………七七

ムーア、ゲートの敗墟……………八一

下院の議場……………八五

三等客車……………八八

「トリビュン」の編輯局……………九二

記者俱樂部……………九六

午前三時の朝飯……………一〇〇

「メール」の社長室……………一〇三

目次……………一〇七

目次

四

汽車中の原稿	一一一
ライシナム座	一一四
無名の投書	一一八
日本人倶楽部	一二三
晚餐とシガー	一二六
「タイムス」の索引部	一三二
「タイムス」の編輯局	一三六
婚禮とブレイン君	一四〇
日本語の「君が代」	一四四
アールスコートの日本村	一五二

倫敦の下宿

(一六二—二〇八)

目次

下宿さがし	一六二
下宿の一日	一六六
女のお客	一七一
向ひ合せのお客	一七五
箸と酒と福神漬	一八〇
ペイン夫婦	一八四
獨人ミンク	一八八
若い細君	一九四
わが同業	一九九
宿の一家	二〇五

レムの里

(二〇九—二六五)

はしがき……………二〇九

レミントン……………二一八

デビス老人……………二二一

午餐……………二二三

ストーンレーアム……………二二五

デビス一家……………二二六

レミントンの公園……………二二九

✓ホキットナツシュ村……………二三四

技師が家の晚餐……………二三六

土産の懐中時計……………二四一

沙翁の生地……………二四四

村の縁日……………二五三

✓續レムの里

古城の敗墟……………二五七

未見の知己……………二六六

クロムツェルの生地……………二六九

汽車の乗替……………二八一

雨の田舎道……………二八三

村の日曜日……………二八七

分れの接吻……………二九四

自動車行樂……………二九六

公園の音樂會……………三〇〇

オックスフォード……………三〇四

(二六六—三〇四)



目次

大名屋敷

目次

大名屋敷……………(三三三—三四四)

    ✓サットン、ブレース……………三三三

    ストーンレー、アベ……………三三三

    上(三三三) 下(三三三)

    ウチリック、カッスル……………三三〇

    ガイス、クリッフ……………三三四

    ピンチンブルーク城……………三四二

八

後記の一—白耳義と南獨逸

倫敦出發……………三四五

ウタータール……………三五〇

後記の二—露國橫斷記

ブラッセル……………三五八

白耳義一營……………三六二

南獨の三日……………三六七

維也納の旅行券裏書……………三七二

維也納出發……………三八〇

グラニツア驛……………三八四

ソルシヤウ……………三九三

莫斯科……………四〇一

シベリア……………四〇五

シベリア鐵道……………四〇五

目次

九

目次

車中の日露戦交渉事件……………四一四

ウラル……………四二一

入浴……………四二五

イルクーツク……………四二九

バイカル湖岸……………四三三

車中の日清談判……………四三七

シベリア終る……………四四一

後記の二三―所感二則

不心得なる心得……………四四七

我が観たる露人……………四四九

目次終

大英游記

楚人冠杉村廣太郎著

小引

三月十日敦賀を發し、十二日浦潮着、留まること三日にして、十五日浦潮を發し、二十八日彼得堡に着す。四月七日彼得堡を發して伯林に至り、十四日伯林を發して巴里に至り、二十二日巴里を發して倫敦に入る。

倫敦に留まること約二箇月。六月二十一日を以て此處を發し、同日ブラッセルに出で、二十三日ストラスブルヒに至り、二十五日ウルトツアルヒに至り、二十六日維也納着、翌日維也納を發し、ワルシャワを経て、二十九日莫斯科に着す。

六月三十日莫斯科を發し、七月十二日浦潮に着し、翌日浦潮を發す。敦賀に歸着せるは七月十五日。

# 前記—露獨佛

## 日本海

三月十日、午後第一時船敷賀を發して浦潮に向ふ。夜來の微雨敷賀灣を出で、後全く霧る。風靜かに波平かにして、船大地を行くが如し。南越の諸山漸く雲煙の間に消えんとする頃ほひ、巨鯨の潮を噴いて波間に出沒する者兩三を觀る。甲板の上俄に賑し。汽船モンゴリアは噸數約三千、我が滿洲丸の姉妹船たり。暖室の設備頗る備はり、室内の溫度常に七十度を下らず。乗合ひの日本人は皆寧ろ其の熱きに苦しむ。一等船客は獨人二、蘭人三、日本人五、日本語大に食卓の上に跋扈し、獨蘭の人も遂に相見て、「お早う」などと挨拶するに至る。

十一日終日無風靜穩。斯くの如きは一年僅に一二回と船員のいふ。午前九時朝餐、正午午餐、午後四時喫茶、六時晚餐、八時又喫茶。皆一食を逸せず、一菜を除さず、食堂内歡聲嬉々たり。

午後五時、多少の濃氣を見る。

十二日、起き出づれば、船洋中に假泊して動かす。昨夜二時以來濃霧の爲に進行を停め、今尙東經三十二度二十五分北緯四十二度二十七分の處に在り。浦潮を距ること約四時間の航程なりといふ。衆皆大に閉口す。天明けて後尙霧れず、午に至りて霧益深し。濃々たる海上船外一物を辨せず。

停まること約十二時間。午後二時霧の僅に霧るゝを待つて發す。四時アスコルド島を過ぎ、六時初めて浦潮に入る、灣内一面の流水殆んど水を露はさず。船之れをつきのけ突き破りて進むに、濺々として聲あり。磊々たる氷塊の一たび舷頭に觸るゝや、前なるは

後を押し、後なるは其の又後をつき、水面高くつ立ち上るあり、水底深くもぐり込むあり、一塊動いて千塊萬塊皆動き出づること、左ながら名將の一喝に會うて、虜兵の亂れ散るに似たり。若し夫れ目に餘る巨塊の行手に塞がれるを突き破りて進むや、銃の如き一大水塊は忽ち裂罅を生ずること十餘間、壯觀ならざるにあらず。

斯くて一日を後れて發したる我モンゴリアは、又一日を後れて日暮浦潮埠頭に着したり。(二月十二日夜浦潮客舎より)

浦潮斯德

浦潮に留まること三日にして、僕は正しく三年の壽命を縮めたり。見るも聞くも恐るしきことばかり、進むも退くもいやらしき所ばかり、やれ〜心細し。

船埠頭に着するや、來り集る者堵の如し。中に滿人の薄汚きあり、韓人の汚穢しきあり。

り、韃靼人のむくつけなるあり、殊に哥薩克の古手と來ては、例の毛冠帽を被り、亂れたる毛皮の外套を着け、ぎろ〜と四邊を睨め廻す様、先づ新來の旅客が度膽を抜くに足れり。

日暮れんとする頃、出迎の八十島兄と馬車を驅つて宿に向へば、右の方遙に短銃の音兩三聲を聞く。又何かあつたらしいと八十島兄のいふ。何かとは心がりの至りなり。宿に入れば、空氣の流通も何もなき露人式の家屋、其の暖きは結構なれど、其の臭きには閉口せざるを得ず。用終りて愈臥床に入らんとするに、番頭來りて、強盜の恐れあるを以て洋燈を消し呉れよといふ。番頭氏、僕を赤毛布と見てか、強盜殺人を説くこと詳細を極む。

翌朝小林商店を訪ふ。つい其の二日ほど前、此の商店の近邊の露人の宅に、強盜侵入し、家内残らず殺されたりといふ。又杉浦商店の近所にも、石油を打ちかけて、今や焼

き拂はんす用意せられたる家ありきといふ。強盜殺人の噂頻りなれば、日没後は堅く外出すべからずなど戒めらる。

八十島兄と共に日本の醜窟を見る。怪しき洋装の日本婦人出沒隠見す。いやらしきこと限りなし。とある家の中に入れば、露人四五酒を酌み交しつゝ濁聲高くざれ歌唄へるあり。其の傍に、人目も恥ぢず一露兵の輕々と一娼婦を膝の上に抱き上げて、何やらん語り合ふあり。そこへして此處を出づれば、大道の真中にて制服をつけ長剣を帯びたる偉大の男が、二人の日本婦人を追ひ廻し、抱きつきて、おやッきやといはせ居るを、誰ぞと問へば、八十島兄の曰ふ、あれは露西亞の巡查と。僕陸然たり。

馬屋原商店といふに入る。客年末チエルニゴフカにて洗濯業を営める日本人の、一家盡く殺されて、僅に生後間もなき赤子の生き残り居たるを、此の家に取り取りて養へり。このことなれば、就いて之を見る。生後六七月、可愛き女の子なり。此の子を引き取り

て後、或夜此の家の細君の夢に、二人の女枕頭に立ち現はれ、其中茶縹の衣着たる三十ばかりの女、頻りに子の行末を頼み聞えたる後、己は此の子の母なるが、此の子の大切なる守袋を柵の上に残し置きたれば、之を收めて此の子に與へ呉れよといへりと見て夢覺めぬといふ。其の後此の子の母が三十位の女なりしことは分明したれど、果して茶縹の衣を着て殺されたりや、又守袋が柵の上に残り居りしやは今取調中なり。

今十五日正午、僕は愈此の恐ろしきいやらしき浦潮を後にして、彼得堡に急行せんとす。道中の光景は途中より報する時あるべし。(三月十五日前浦潮にて)

### 浦潮より露都

(一)

三月十五日正午、萬國寢臺車輛會社の急行列車に乗じて浦潮を發す。同社の車輛は

思ひしほどに備はらず、遂に東清鐵道會社のに劣れりと知れる人はいふ。

十六日、哈爾濱に近づくに及び、此の附近に馬賊出没すとて露兵乗り込みり。乗客總員

七八十、中に日本人八九を數ふ。他は盡く獨露の人。

車外多く雪を見ず、車室内の溫度華氏の八十度に及び、食堂内電氣扇を用ふ。換氣の爲とはいへ、暖爐を焚いて電氣扇を用ふるは、蓋し珍無類なり。

十六日午後三時哈爾濱を通過す。(三月十六日哈爾濱にて)

(二)

十六日午後四時、停車一時間の後哈爾濱を發す。哈爾濱以西齊々哈爾附近に至るまで沃野千里、一望際涯を知らず。

十七日午後二時半、海拉爾を通過す。此の邊に至りて、初めて處々殘雪を見る。浦潮以來雪を見ること甚だ稀なりしが、海拉爾以西雪漸く多く、見る限り渺茫として雪なら

ざるはなし。

八時滿洲里停車場に着す。滿洲鐵道此に終り、是れより愈西伯利亞に入らんとす。

此處にて停車一時間、手荷物の検査を受く。(三月十七日滿洲里にて)

(三)

昨夜滿洲里驛税關の荷物検査頗る面倒を極め、約三時間を費して漸く發せり。僕はよく怪しき者と見認められけん、荷物の底の底まで引くり返され、再三行先を尋ねられ、剩さへ旅行券まで調べられたり。

今朝來、道西伯利亞に入りて、氣溫高く、車外に出づるに必ずしも外套を須ひず。十時アドリアノフカ停車場を過ぐ。此の邊の線路紆餘曲折甚だしく、一進一退時に殆どS字形をなすことあり。白雪日に映じて鮮麗人目を眩す。

午後四時半列車チタに着す。(三月十八日チタにて)

(四)

十九日正午、ウエルフニウジンスク停車場に着す。日麗かなれど風甚だ寒し。停車二時間餘。

此の日終日氷雪の間を走り、時々荒村寒落を見るのみ。三時セリングガ停車場を過ぐ、驛内頗る雑沓の體なり。

露領に入りてより、浦潮、哈爾賓、チタ皆時間を異にし、何時が何時やら全く滅茶苦茶となる。此のはがきを認むる時、イルクーツク時間にて午後二時四十五分、露都にて午前七時三十分、東京の午後四時なり。

僕等は今夜バイカル湖を通過し終り、明朝未明イルクーツクに着くべし。

(三月十九日セリングガにて)

(五)

午後四時初めてバイカル湖を見る。列車樺樹の疎林を過ぎ、湖影林間に隠見す。須臾にして列車林を出れば、眼界頓に開けて、湖面萬頭の白水皓々として一帯の白紗を布くに似たり。對岸の諸山恍として煙の如く、吹かば將に消えんとす。

暮れなんとする頃、タンホイ驛に達す。湖光山影依稀として人に寝かす。顧みれば、絲の如き織月西に在り。シベリア原頭の暮色亦愛すべし。停まること甚だ長くして日全く暮る。

八時半ウードリノ驛に着す。此處にて又もや手荷物物の検査を受く。

(三月十九日ウードリノにて)

(六)

二十日未明、列車イルクーツクに着し、此處にて露國式列車に乗り替ふ。露國式列車は、其の室内裝飾の外、設備に於ても、待遇に於ても、食事に於ても、遙に今までの萬

國寢臺車輛會社のに勝れり。殊に車中浴室を備へ、二留にて乗客の入浴に供したるが如きは最も珍とすべし。

乗替に時を費すこと夥しく、四時間の後漸く發す。時に午前八時なり。此處にて浦潮以來室を同じしたる土耳其の俳優マニバエフと分る。氏は別室なる露國第一流の名優アデルゲーム一行中の一人なり。快活洒脱、能く語り能く笑ひ、屢滑稽を演じて同室の無聊を慰めたり。一座イルクーツクにて一興行すべき筈なりといふ。

(三月二十日ウイにて)

(七)

二十日朝イルクーツクを發してより、列車枯木寒林の間を過ぐ。人煙稀少鶏犬の聲を聞かず、其の荒れさびたる様、誠にシベリアの野たるに恥ぢず。途中屢雪に遭ふ。又時に複線工事の準備らしきものを見る。二十一日朝來大に雪ふる。クリチンスカヤ驛に

達せる頃最も甚し。此の邊積雪約三尺。十二時チンスカヤに着す。雪尙已まず、四顧深々たり。

シャルビーシエ驛に至りて、莫斯科發の萬國寢臺車輛會社の急行列車と行き合ふ。此の驛を過ぎて、雪初めて霽る。線に沿うて樺、松、落葉松の密林繁茂し。殆んど其の盡くる所を知らず。(三月二十一日午後三時汽車中にて)

(八)

昨イルクーツクに車を替へてより、僕と加藤ドクトルと臺灣總督府技師の一行と室を同じうするととなり、邦人四人一室を占領す。此に於て食後の茶談大に賑ひを加へ、談笑の聲屢四隣を壓す。長旅の事として、追々に車中に知り合も出來、隣室の獨逸人も遊びに來れば、西伯利亞狙撃隊の士官とやらいふ露人も酔拂つて管を捲きに來る。又なく賑し。



浦潮より露都

午後三時カン河の鐵橋を涉り、カンスク驛を過ぐ。繁盛なる小市街なり。各驛に於て行き違ふ列車漸く多きを加へ、停車驛亦其の數を増し來れるが如し。夕刻より又雪ふる。車外溫度列氏零下五度。(三月二十一日夕汽車中にて)

(九)

クラスノヤルスクは昨夜の中に通過し、今日は朝來唯雪中を走る。別の奇なし。午後二時マリンスクを過ぎ、六時タイガ驛に着す。シベリア鐵道の中央點たり。トムスクに至るの支線は此處より分岐するなり。「タイガ」は「密林」の義、名にし負ふ密林線路の四邊を埋めて眼界頗に塞がる。氣溫列氏五度。甚だ暖し。車中書を讀む。倦み來れば眠る。覺めて同室の武藤翁、藤江技師、加藤ドクトル等と語る。談半にして停車場に着すれば、出で、繪葉書を求め、又プラットフォームを歩す。ヤボンスキーとて驛内の男女皆目を屬す。朝九時に起き、十時茶を喫し、一時朝餐

を喫し、七時晚餐を喫して、十時臥床に入る。之を昨今の日課とす。唯今日本の午後十時にして日未だ暮れず。(三月二十三日タイガ驛にて)

(十)

昨、雪中に暮れ、今、雪中に明く。天明かに氣は清けれど、風いと寒し。十二時カインスク驛に着す。密閉したるまゝ、殆ど全く換氣を行はざる、我が列車の空氣は、日を経るに従つて漸く腐敗し、不快いふ可からず。停車場に出づるが何よりの樂しみなり。

浦潮以來入浴せざること十一日、如何にも不快なりければ、今日は二留を奮發して車中の湯に浴す。浴場は方一坪許り、シャワー、バツスあり、化粧臺あり、甚結構。塵垢を一洗して後、紅茶一椀を味ふ。シベリア旅行中第一の快事なり。

午後九時オムスクに着す。明夕は愈ウラルにさしかゝるべし。(三月廿二日オムスクにて)

浦潮より露都

(十一)

三月二十四日、午前六時ベトロバウロウスク驛を過ぎ、八時半ベツーフ驛に着す。氣温列氏の零下十八度、萬象盡く氷化して、戸壁も樹枝も窓硝子も、荷も一點の水氣をだに存せん限りは、一物として凍らざるなし。殊に樹枝の凍りて左ながら白珊瑚の立てるが如き、鮮麗いふべからず。積雪深さ凡そ三尺、霜柱高さこと一尺、砂の如き微雪霏々として降る。但し車中は例によりて華氏七十度以上の暑さ。やれ〜シベリアは暑い處と、同室の皆々つぶやく。

午後一時クルガン驛に着す。今夜チェリアピンスクに着すべし。(三月廿四日クルガンにて)

(十二)

昨夜月明ウラルを過ぐ。積雪滿地月色流るゝが如し。夜三時絶頂なるズラトウスト驛に着するを待つて、初めて臥床に入る。夢は歐亞の境を辿りて、今朝起き出づれば、身

は既に歐羅巴に在り。

正午ウソソ驛に着す。ウラル以西雪漸く深く、時に丈餘に及べるあり。皓々たる萬頃の平野、渺として晴空一碧に連なり、天下の壯觀を極む。列車走ること三五時にして、尙其の觀を改めず。其の廣さを知るに足る。

夜半サマラに着すべし。(三月廿五日夕汽車中にて)

(十三)

二十六日皚々たる白雪遠く天際に連ること、依然として昨の如し。

此の日未明サマラに着す。中央亞細亞に向ふ支線は之より分る。七時ウナルガ河の大鐵橋を過ぐ。長橋長さこと約十八町、試みに車背の窓を開いて之を見るに、過ぐること半にして、橋端既に遠く白雲裡に没するに似たり。工費三百萬留を投ずといふ。五時ベツザ着、次第に歐羅巴臭くなり來る。

明日は愈々莫斯科に着くべしとて、車中一同大に浮かれ上る。(三月廿六日夕汽車中にて)

(十四)

二十七日午前十一時莫斯科着。彼得堡行列車の出發を待ち合す間に、急ぎクレムリン宮を見る。例の巨鐘を初め歴代帝王の遺骸を拜し、玉冠寶衣を見、次手に何とか僧正の爪の垢とか額の皮とかいふ物を見せらる。

午後四時ニコライスカヤ停車場より乗車。一夜を不自由なる普通列車の中に明して、今初めてベチエムブルグに到着せり。僕元氣依然として旺也。

(三月二十八日午前七時廿分彼得堡にて)

滿洲里停車場

(シベリア道中の一節)

滿洲里停車場へ着いたのは丁度午後の八時、高く吊した白熱瓦斯の光が青白くブラツトフチームを照して、「附け剣」の露兵が三々五々嚴重に夜を警めて居る。

此處の税關で荷物の検査があるといふので、加藤ドクトルや浦潮杉浦商店の近江岸君や其の外三四人連れて列車を出て見る。外は非常に寒い。何處で何う検査をするものか皆目分らぬので、兎も角もと大きな二重張の戸を押して停車場に入ると、何處に行く積りのものか、旅装した露兵が、廊下にも待合室にも、殆ど立錐の餘地を存せぬ程にうちや／＼して居る。暖爐の暖まりと人いさげと煙草の煙とで、生温い空氣が濼々として左ながら蒸し返す様な。夫れに忌アな甘ツたるい一種の臭氣がする。眼鏡がばツと曇つて仕舞ふ。

ヤボンスキークと呼び交はして、ちろ／＼と我等を眺めては何やらんさめき合ふ露兵の間を分けて、とある事務室に入ると、此處に憲兵らしい體の小さい恐ろしい早口

の男が居た。近江岸君との問答一渡りすんで、我等は列び大名の渡り臺詞といふ體裁で、譯も分らず順々に一寸目禮して出やうとするに、丁度我等を尾けて來たものゝやうに、備備と潜び寄つた大きな男が後から出て來た。見ればぐじやぐじやになつた毛冠帽を阿彌陀に被つて、顔は一面に血だらけ、眼の下からはまだだらりと滴つて居る。我等はぎよッとして思はず聲を立てやうとしたが、近江岸君の説明で、醉漢が何か憲兵に訴へて出て來た者と分つて、漸く胸を撫で下した。相手の男が憲兵であつたのも憚りながら、我等江戸ッ子には此時初めて分つたのである。

此處を出て又待合室に來ると、露兵が又もやちう／＼と見やがる。足を踏み延ばして土間に腰を下した儘、薄氣味の悪い顔で見上げるのもあれば、荷物を枕に踏反り返つて寢たのもある。我等小六の類ではないが、うっかりして飛んでもない藤吉郎を飛び出させては大變と、殆ど拾ひ足で通り過ぎやうとする途端、立談をして居た露兵は我等を見て、

諸君半分に其の中の一を我等の方へ突き飛ばした。突き飛ばされた一人はよろ／＼と加藤君に突き當つたので、此の上喧嘩でも吹きかけられてはと、はふ／＼の體でプラットフォームに立ち歸つた。

此處で彼此二三分も待合すと、貨車から荷物が運ばれて、續々プラットフォーム脇の税關に持ち込まれる。時分を見計つて税關に入ると、結界の上に大分荷物が列んで居る。僕の荷物は幸ひ二番目に在つたが、一番目の陸軍將校の荷物から絹織物が出て、目方を量つたり代金を見積つたり、大分手間が掛つて漸くのこと僕番になつた。税關吏が大な手をトランクに差し入れて、中の品々を一一引張り出して來る。堪つたものでない。後で聞いた話だが、僕の露都行のことが浦潮の革命黨の新聞に出て居たので、豫め驛々へ注意が回つたとかで、僕の荷物は大分手厳しく調べられた。中にも諸方から貰つて來た日本文の紹介状は、餘程變な者と見えたか、検査官が小首を捻つて、同僚と密々

滿洲里停車場

何やら喘き合つて、却々通過しさうになかつたのを、側に居合せた元元山領事の武藤君が辯明して呉れたので、漸く助かつた。夫れから僕の行先を執念深く問ひ糺した上、更に旅券を出させて、何處へか持つて行つたさき、急に返して呉れぬ。やつさもつさで漸く此の難關は通過したもの、日本を出る時折角と考へに考へて詰め込んだ荷物を、底の底まででんぐり返されて、之を片付ける手数は容易のことではなかつた。

自分のが済んだ後、外の連中は何かと見て居ると、哈爾濱から乗り合せた佛蘭西の藝妓二人、之も大きなトランクを三四箇捲くり廻されて、大こぼしにこぼして居る。露國の名優アデルゲームの一行中の荷物の中から、芝居用の劍が五六本出て来て、之れも大分やかましかつた。若し夫れ加藤ドクトルの荷物検査に至つては、天下の滑稽を極めたもので、先生初からドクトルで済して居ると、荷物の一番上から日本文の書物が出た。是は何だと問ふ。解剖學の書だといふ。聞くが早いか、税關吏が何心なく其の中を開く

と、所もあらうに、出たも出たり、一頁大の婦人生殖器の圖。流石の税關吏も満面に苦笑を湛へて好矣。

斯て税關の検査が済んで、荷物が貨車へ送り返された後、更に車室内の手荷物が一寸調べられた。列車が再び滿洲里を發したのは午後第十一時、丁度此處で三時間かゝつた譯になる。(露都にて)

露國議會を見る

四月二日午前九時、「大阪毎日」のマツカラ君に案内せられて、露國議會の見物にと志す。議事堂は舊王宮の一を假用したるものとして結構頗る壯麗なり。馬車を車寄に捨て、内に入れば、早や絳々と詰めかけたる傍聴人の外套帽子、所せきまでに掛け列べられたり。今日は重要な豫算案の議事に大藏大臣の演説あるべく、ようせすば解散の非運を

露國議會を見る

見るべしとて、斯くは詰め掛くるものゝ多きなりと、マツカラ君は語る。田舎者の京見物、譯も分らず暗雲に其の後に随ひ行けば、兩側に居列ぶ守衛受付使丁の類、例の金光燦爛たる制服に、目さむるばかり色さやかなる勳章佩劍の仰々しきに似げなく、一々丁寧に脱帽して我等を見送る。丁寧なるは嬉しけれど、外套の脱がせ賃十文、上靴の取り揃へ賃十文と、一々に金欲しげなるは全く以てうるさし。

休憩室とも見ゆる大廣間を横ぎりて議場に入れば、今しも振鈴の響盛に開えて、議員は夫々着席の最中なり。一番に僕の目につきたるは、例の此の程墜落したりといふ天井にて、之は新に張り替へて間もなければにや、塗りもやらず白木の儘なり。議長席の右側は政府委員席にて、其の前面の前列に諸大臣居列べり。右端に頭髮の黒く若やかなるは首相ストルイピン、胡麻鹽の鬚生ひたる小柄の人は大藏大臣コ、ウゾフ、禿げたるはスワニパツハ、禿げざるは誰と、マツカラ君一々教へ呉る。我等新聞記者席は、政府

委員席の直隣に在りて、此處には廿餘名の記者既に夫々に陣取りたるを見る。主として多きは露英米、次には獨伊の記者なりといふ。中に三五名の婦人立ち交れり。マツカラ君其の一兩名を指して僕に囁いて曰ふ、あれは御亭主の代理に來りて傍聴するなりと。我が邦にて斯ることあらば、嗚かし記者俱樂部の大問題となることなるべしと、我知らずほゝるまる。

議長席の眞下が演壇、其の又眞下が速記者席なること我が邦のと同じ。但し速記者の半数が婦人なると、其の交替時間が殆ど五分間位宛なるとが、聊か異様に感ぜらる。議長は議長席より見て右黨左黨中央黨の配置何處も變らず。一般傍聴席は左側の二階を之に宛てたるが、ぎしと押詰りたる傍聴人の殆ど過半は婦人なるぞ面白き。正面より右側にかけては外交官高等官の席、流石に此の席ばかりは人疎なり。そが中に、とある圓柱の脇に手を額にして坐せる藍色の軍服着たる一將軍あり。さて、見たとのあるやう

露國議會を見る  
二六  
なとマツカラ君に囁けば、マ君の曰ふ、見たこともあらう筈、あれはクロバトキン大將なりと。

更に眼を轉じて議員席の方如何にと見てあれば、之は又何等の珍無類ぞや。議員の總數約四百、何さま二十餘の人種を集めたる露西亞のことゝて、其の服装より面がまへ、思ひ切つて天下の奇觀をぞ極めたる。コスメチック香やかに分目正しく髪を梳りたる當世風の紳士はいはすもがな、頭に總髪を垂れ法衣の裳寬かに曳きて、胸に十字架儼かにひけらかしたる僧侶の八九名ばかり右黨の中に立交れる、先は我が邦にて見られざる所なり。左黨の中には百姓議員と唱ふる者あり。ハイカラぶりをのみ是れ事とせる我が邦の夫とは變りて、蓬頭亂髮、顔は鬚に覆はれ、手はむくつけく節くれ立ち、我が邦ならば筒袖股引の姿とも見るべき赤又は黒のシャツを胸露はに着し、短衣もつけず襟もつけず、大手を振つて議席の間を往來する様、勇ましなどいふ許りなし。十餘の鞮靴議員

が帽子を被れるまゝ議席に着ける亦珍らし。彼等の俗、脱帽を以て禮とせず、敬意を表するには靴を脱ぐを法とすといふ。彼等が演壇に立たん折、果して能く其の俗に従ふべきや否やを知らず。中央黨の中央に亞刺比亞式の白巾くるくると頭に捲きつけて、高く群を抜ける一人あり。曰く是れ南露の回々教徒と。其の少し左に、我が邦の厚子に似たる白色の長衫を被り、其の下より幅廣き帶様のものを捲きたるが見ゆる男あり。何處の米屋の番頭にかと怪しめば、曰く是波蘭人の正装したるものと。左黨議員の中、白襟をつけたるもの凡そ半分、つけざるもの亦半分、熱誠なる拍手の聲は、必ず先づ此の無襟の一隊より出で来る。

議事は大藏大臣の豫算案に對する説明演説に始まり、民吏兩黨交々立つて論戰頗る盛なり。二時一先休憩したる後、更に議事を繼續して夕刻に及べり。其の間に首相ストルイビン氏も演説し、藏相コ、ウソフ氏も二回、各一時間餘の長演説を試み、肥大なる右黨

露國議會を見る

露國議會を見る

二八

の領袖ボブリンスキー伯も演壇に立ち、社会民主黨の首領たるアレキシンスキー氏も、瘦癯を提げて兩三回演壇に現れたり。ア氏は背丈低く顔色蒼白く、頭に小さな髻を蓄へ、一見風采頗る揚らず、ボ氏と相對して好個の對照を見る。議論の内容は總じて我等田舎者に分らず、唯此の日某なる百姓議員が皺枯れ聲を振り上げて、頻に經費節減論を唱へたる中に、『クロバトキン將軍は年俸十三萬千留、マカロフは十萬留、日本の東郷大將は僅に六千餘留のみ。而も負ける者は矢張り負け、勝つ者は依然として勝つに非ずや。』云々の語ありしとかにて、人の笑ひ合へるを見たり。惜むらくは、此の時樓上既にクロバトキンの影を見ず。

議事未だ全く終らねど、今日は解散さるべくも見えねば、マツカラ君に依つて英米の同業者に紹介せられたる後、日暮此處を去りて宿に歸る。チソ河岸の人通、風は寒けれど流石に春めきて見ゆ。(露師イギリス、ホテルにて)

客舍閑語

大なるは露國の特色なるべし。小さきは紙巻煙草ばかり。町の名前べらぼうに長く、料理の一人前は迎も我等に食ひ盡し難し。佛蘭西河岸十四號が、フランツースカヤ、ナールベレチナヤ、ノーマル、チエテレーナツアツイとあつては、豈に夫れ發句にも都々逸にもなるものならんや。

ウラルを越えたる後何とか言へる停車場に停車中、餘りの蒸暑さに、試に二重張りの窓を開きて頭を外に出せば、村の百姓達我等を珍らしと見てか、追々に窓の下に群り至り、老若總勢三十餘名口々に、支那人だらう、朝鮮人だらう、いやキルギースたらう

客舍閑語

二九



客舍閑語

三〇

など、囁き合ふが聞ゆ。請ふに任せて巻煙草二三本窓より投げ與ふれば、形勢忽ち一變して、「日本人。日本人」と呼交して一同哄と打笑ふ。百姓と雖もなかく以て侮るべからず。

夜更けてテウスキー、プロスペクトの邊を歩けば、賣女の往來頗る繁きに驚くべし。或者はわざとすれ／＼に後より我を追越して過ぐ。或者は後より歩み來る人ありと尻目に見て、故らにぶらり／＼と歩いて道を塞がんとす。或者は行違ひさま早口に何やらん物言ひかく。或者は人の顔を見て、さも馴れしげにたりと笑ふ。薄氣味の悪きこと甚し。或夜我等とシベリアを同行せる某君、宿に歸らんとて途を急ぐ折しも、彼方より夫とおぼしき三人連の女ひた／＼と近づき來りたるが、あはや摺れ違はんとする刹那、ちろと某君の顔を見やりて、言ひ／＼言ひたり、日本語にて「今晚は！」

西歐羅巴の旅券に、單に歐羅巴諸國とのみありては露國を含まず。若し露國に行かんとする時は、旅券の表に「歐洲及露國」と書き入るゝ由、某米人語りき。露國は歐羅巴の中に入らずと見ゆと、其の人笑ふ。

冬宮の中を拜觀したる時、アレキサンドル二世が臨終の間といふがありき。室内の調度孰れも帝が臨終の折の儘に存しつとて、帝弒殺さるゝ時喫し居たる巻煙草の半ば吸ひさしたるをさへ、小さき硝子管の中に保存しあり。室内の時計は恰も刺客の手に罹られたる時、はたと止りたるを其の儘にしつといふといふに、さては何時なりけんと見やれば、恰も三時三十三分なり。成程之は運の悪い數なりけりと可笑し。

客舍閑語

三一

ツアルスコエ、セロを見に行きける時、汽車中にてペーデカーの案内記を讀めるに、同所の名勝を擧げて、山林池沼宮殿堂宇など列べ立てたるが中に、「廢墟」といふがあり。巡覽中就いて何の廢墟ぞと問へば、同行したる聯合通信社のツアノフ氏説明して曰ふ、廢墟とは自然の風致を添へんとて、故らに石垣や小屋の崩れかけたるものを作れるなりと。作るものに事を缺いて、わざ／＼破屋崩れ垣を作るとは物ずきにも程がある。

○  
○  
彼得堡に日露戦争油畫展覽會といふがあり。さしたる名畫はなけれど、品の數はなかなか多し。戦ひに勝ちたる日本には却つて之あるを聞かす。

彼得堡ばかり小うるさく酒手を取らるゝ所はなし。外套をぬがせ、上靴を取り揃へ呉

るゝにも、一碗の茶を茶店に啜らん折にも、博覽會などにて二つ三つ説明を求めても、宮城の内殿を案内せられても、必ず相當の酒手を握らすを法とす。我等が公使館を訪へる時、短剣を佩び勳章七八個を吊し、金光燦爛たる制服を着したる大の男、門内に立ち居たり。はつと驚いて恭しく脱帽すれば、側なる人打笑ひて、彼は公使の御者、歸りしなには十文か二十文かを取らせ玉へといふ。(四月七日露都イギリス、ホテル樓上にて)

### 露都より伯林

四月七日午後十時十五分、仙風兄及浦潮以來行を共にしたる武藤藤江勝野の三君に見送られて、ワルンシャツ停車場出發、伯林に向ふ。

僕と車室を同うしたるは三十ばかりの露西亞人。彼は日本語を知らず、我は露語を解せず、相對して黙坐するもの少時。彼れ僅に佛語を解す、此方も聊かながら之を知れり。

露都より伯林

露都より伯林  
乃ち談緒は手まね身ふりを加へて先づ彼より開かる。其の語る所に據れば、彼の名はヲ  
ルフソン、彼得堡大學の一學生にして、兼ねて皮革の取引を業とす。今商用を帯びてラ  
イブチツヒに向ふといふ。

三三  
さて其の相識るに至りし迄の道中こそ可笑しかりけれ。彼れ初め突如として學生な  
りといふ。之れは苦もなく僕に通じたり。次で又突如としてポーといふ。僕は早速エド  
ガー、ポーのことゝ心得て、詩人かと問ひ返せば、彼れ腹を抱へて笑ふ。今度は彼れフ  
チャックスといふ。僕はジエームス、フチャックスなるべしと合點して、政治家なるべし  
といへば、彼又呵々として笑ふ。彼れ沈思や久しうして後、今度は手の甲の皮を少し  
摘み上げて、ラ、ポーといふ。成程之にて初めてポーは皮のことゝ分り、次で彼がネゴ  
シャンといふに及びて、初めて皮革商なること分明したり。彼が先づフチャックスといへ  
るは、故に英語を用ひて狐の皮や何かを賣買すとの意を示さんとしたるなり。之を詩人

や政治家と心得て、したり顔に應答したりければこそ、彼は腹を抱へて笑ひつるなれ。  
側に人が見て居たらば如何に可笑しかりけん、思ひ出す毎に吹き出さる。

兎角の話に夜は更けて、臥床に入りしは十二時過なりき。其の夜はぐつすり寝込み  
て、翌八日目を覺せば早九時なり。昨夜仙風兄に急き立てられて、夕餐の代りに茶一椀  
を喫したるのみなれば、空腹殆ど堪へ難し。食堂車はなし、さりとして無暗に停車場に出  
で、乗り後れては大變なり。ラルフソン君が起き出づるを待つて、スウエンチャコ停  
車場といふに下り立つ。停車僅に十分。サンドウキツチ二片を頬張れば、早三四分は過  
きたり。茶を喫せんとするに、熱くして飲まれません。ヲ君斯くして飲めよと教ふるを見れ  
ば、茶を少しづつ皿に明けて飲むなり。成程と合點して、急ぎ飲み干して車に歸れば、  
入るが早いか、するくと動き出づ。ヲ君は僕の尙物ほしげなるを氣の毒とや見けん、勝  
詰やら、握飯のやうな、ガンモドキのやうな變な物やら、棗の砂糖漬やらを取り出して

露都より伯林

三六

類に侑め呉る。我輩戰勝國の民がと濟しても居られず、我を折つて類に之を頂戴す。

十二時ウキルナ停車場に着す。プラットホームにて六十許りのお婆さん達に逢ふ。此の人ヲ君を介して僕を彼得堡にて識れりといふ。僕は一向知らぬといへど、お婆さん固く執つて動かす。何でもかんでも知つて居るとて、其の以來僕の顔を見る毎に、馴々しく物を言ひかけ、時には何やら酒々と辯じ立つ。僕には何の事やら一切分らず。ヲ君は此處にて茶を喫したる後、悠然として斬髮屋に入りて髪を剃る。僕躍氣となつて急ぎ立つれども、先生落ち着き拂つて、「余は露國の萬事を知れり」とて背かず。遂に危く乗り後れんとして助かる。

四時半國境停車場に着して旅券の取調を受く。ヲ君は此處にて露貨の兩替にさんく手間取りたる後、又悠然として茶を喫すること例の如し。お婆さん追つかけ來りて話しかくることも亦例の如し。五時過此處を發し、五時十五分愈國境を通過して、獨領の

國境停車場アイトクローネンに至る。此處にて獨逸の列車に乗り替ふ。露國のに比して車甚だ美なり。給仕と覺しきが間もなく入り來りて、何やらん言ふ。解らず。彼、佛語英語獨語露語其の外何語が分るかと問ふ。僕いまくしくて堪らず。日本語支那語朝鮮語亞刺比亞語及英語皆分ると答へてやる。乃ち其「及び英語」がお役に立つて、彼れ「食事が御入用ならば、何時にても御用に應ずべし」といひて去る。六時アイトクローネンを發す。道獨逸に入りて、四圍の光景全く一變し、雪の地に布けるを見ず、地の耕さるるを見ず。而して一美人を見す。流石に露西亞は美人の多き國なりき。之をヲ君に語ればヲ君も亦常に然思へりといふ。

九日午前六時伯林に入る。青草滿地春雨蕭條たり。日本を出で、以來、斯く春めかしきを見ること之を初とす。フリードリッヒ、ストラッセに車を下り、ヲルフソン君と例のお婆さんとに分れて、急ぎポツダム、プラッツなる當ベルビュー、ホテル樓上の一室

露都より伯林

三七

に搭す。但し樓上の一室とのみにて、エレベートルで盲滅法界に案内せられたること、  
て、未だ其の三階に居るのだから四階に居るのだから知らず。

(九日午前九時半伯林ベルレー、ホテルにて)

### 伯林警見記

露都より伯林に來れば、次第にメンチガルなる西歐羅巴の特色を見る。獨逸の汽車に  
乗れば、戸の開閉は兎せよ、暖室機の調節は角せよと、一々揭示しあり。停車場に下れ  
ば、何處をどう出て、何處で馬車を雇ふべきかといふと迄、細々と書き記しあり。若し  
夫れ停車場より馬車を驅らんとするに、客待中のものならば、必ず「フライ」と書きた  
る立札を掲ぐ。行先を斯くくと命すれば、其の命せられたる所に送り届けずんば已ま

す。賃錢は例の自動装置に依りて、車輪の回転數に従ひ何馬克何片と乗客の目前に現は  
れ來る。賃金を支拂うて些の餘利もあらば、車夫必ず釣錢を出す。之を、露國の馬車が  
確と行先も究めずして盲滅法界に驅け出し、賃金の受け渡し滅茶苦茶なるに比して、如  
何にも西洋らしきを覺ゆ。

皇居の拜觀の具合を見るに、自ら露西亞の鷹揚なると獨逸の細きとは明瞭すべし。冬  
宮の見物には、泥靴の儘にて板の間敷物の上を歩き回りて答められず。案内者には人の  
代る毎に、見物人の手心次第にて如何程かの金を取らす。獨逸の皇居にありては、初め  
より拜觀料として一人五十片宛を徴し、城内にては、一々羅紗製の上靴を貸し與ふ。見  
物終りて愈辭し去らんとする時、出口の壁に「宮城の吏員は訪客より一厘錢を受くるこ  
とを得ず。犯す者は解職すべし。」と獨英佛の諸語にて揭示せられたるを見る。

伯林警見記

四〇

露獨の皇居の拜觀の手輕なると同じく、議會の傍聴も亦極めて手輕なり。露國にては新聞記者として最上の傍聴席に入るを得たるも曩に既に語りつ。獨逸にては、門衛に旨を通ずるのみにて、傍聴券をも入場料をも要せずして傍聴することを得たり。僕が入れるときは、恰も保守黨のノルマン氏が演説中にて、引續き内務大臣ボサドフスキー伯の演説あり。ノ氏は演壇より聴衆を見下して、破鐘の如き聲を振ふ。ボ伯は大臣席より斜に向直りて、肅々として語る。彼は猛烈に、此は森嚴に、兩々互に劣らぬ快辯を闘はす。演説の態度音調、露西亞にも我邦にも一寸見られぬ所なり。

一時間餘の傍聴にて僕の氣につきたること三つあり。一は速記者が床の下から出入することなり。之は日本の如くざわくざわと議席の脇を往來するよりも遙に優れり。二は議員や政府委員が他の演説を聞かんとて、次第に演壇の近邊に押しかけ行くことなり。之

が爲後方の議席の如き全く人影を見ず、演壇の前後左右は黒山の如く人立圍むに至る。三は他人の演説に對し拍手すること殆どなき是なり。演説中評語を放ち、演説終りて後手を握りて其の勢を痛ふ如きことはあれど、僕が傍聴中は、一回も拍手の聲を聞きたることなかりき。

市中を歩するに、到る處現カイゼルの意氣の發露するを見る。曰く、チアガルテンの大道は陛下の御設計。曰く、フリードリッヒ街路の改築は陛下の御宿望。曰く、此の運河は陛下によりて何とかせられんとし、彼の鐵道は陛下によりて彼とかせられんとす。曰く、此は陛下の思召。彼は陛下のお好み。曰く何、曰く何。多能にして精勤なる現獨帝は、殆ど一切を維廉化せずんば已まざらんとするものに似たり。

一日宮城前をぶらつき歩けるに、恰も陛下が三五の騎兵と遠乗より還御せられんとす

伯林警見記

四一

伯林警見記

るに會す。路傍觀る者塔の如し。陛下一々此に御會釋あらせらる。城門に近づきたる頃一輛の自動車疾風の如く驅け來る。あはや摺れ違はんとせる時、御者帽を脱して禮すれば。陛下亦之に答禮せらる。愈門に入らんとせる時、門脇に客待し居たる一馬車の御者臺の上より鞭を唇にあて、敬禮すれば、陛下顧みて、之にも丁寧に擧手の禮を施し玉ふ。

○ 某の日之を某甲君に語る。某甲君の曰く、夫程のことは一向珍しからず。余は夫にもましたる逸話を知れり。陛下は毎朝九時必ずチアガルテンを散歩せらる。時には皇子達と共にし、時には皇后陛下と共にせらるゝことあり。一日騎馬にて此處を通御ありしに、某家に召し使へる日本の女中、怪しき身扮して乳母車押しつゝ行き會ひ參らせ、我國ぶりに頭を下げしに、陛下馬上より打見やりて、快く之れにも御答禮遊ばされぬ。畏れ多きことなりきと、其の女の語りつ云々。

○ 某乙君之を聞いて、笑つて曰く、斯く迄にし玉ひて、始めて民心を收めさせらるゝのみ。我邦の様とは比ぶべくもあらずと。僕服せず。更に之を某丙君に語る。某丙君亦笑つて曰く、知らずや、獨逸の法律には、不敬罪の規定苛細を極め、年々の犯人五六百に上れることをと。

○ 一日某とウンテル、デン、リンデンに歩いて、道行く人に道を問ふ。其の人、君は日本人ならずやとて、さも親しげに右手を某の肩にかけて、丁寧な道を教へ呉る。又一日チアガルテンにてのとなりき。遊び居たる子供の、我等を見て支那人なりと囁き合へるがありしが、側に居たる一人の老女、叱りつくるやうに之に目加せして、さて何を語り出づるか耳立つれば、曰く叱、叱、彼等は支那人に非ず。彼の勇敢なる日本人とは即

伯林警見記

ち之れと。(四月十三日伯林ベルビュー、ホテルにて)

伯林より巴里

### 伯林より巴里

伯林に日本俱樂部といふものあり。シエーターベル河岸にさゝやかなる家を賃して會館とし、圖書室、食堂及球突場を備ふ。會員凡そ七十餘名、其の他尙も邦人の伯林に入るものは、其の學生たると軍人たると商人たるとを問はず、必ず一たびは來りて此處に牛鍋をつつき、味噌汁を平らげざるなし。相見る十年の友の如く、談柄盡く我邦の事に係る。僕の伯林に在るや、僕も亦履行いて、此に語り且つ食ふを樂みとせり。

四月十三日夕、僕伯林を發せんとするに先ち、行きて暇を相識れる諸兄に告ぐ。偶北海道セメント會社の篠崎君、赤十字病院の吉本君、逓信省の廣部君、高等師範の佐々木君、柔道の大家大野君、伯林大學の東君等在り。皆留學生森竹某氏病危篤に陥り、命旦

夕に迫れるを語りて、悵然として憂色あり。森竹氏は八代海軍大佐の義弟にして、當年僅に廿二歳、腸肺及喉頭の結核に罹り、今や到底救治の道なしといふ。八代大佐其の竟に救ふべからざるを知りて、而かも看護扶養寸時も之を忽諾に附せず。食餌は一々自ら之を鹽梅し、便利盡く自ら之を司る。其の勞を厭はず、費を吝まず、危きを恐れざることを、誰とて敬服せざるはなし。去る日斯道の大家某博士を招きて診を乞ふ。博士一診して後入院を勧む。大佐、入院せば治療の見込あらんかと問ふ。博士曰く、治療の見込に至つては全くなし。唯之を家に置きて、病を貴下に傳へんことを恐るゝのみと。大佐然然色を作して曰く、余既に一たび誓つて看護の任に當る、唯其の任を盡さざらんことを恐れて、未だ曾て死を怖れずと。遂に應せず。

午後九時半、敦賀以來一たび分れて又會したる加藤ドクトル、「東亞」の老川君及東君に送られて、ポツダム停車場より發車す。室を同じうせるは一獨逸人。彼れ始めより

伯林より巴里



終りまで一語を交へずして寝ぬ。翌旦七時コーレン驛にて車を代へ、午前九時五十分國境を出て、白耳義に入る。白耳義に入れば、時計は逆にひっくり返つて九時十分となる。日本の時計はと見れば、正に午後五時二十分也。白耳義に入りてより、沿道の光景頓に春めかしきを加へ、汽車は青山清泉の間を縫うて走る。細流に釣を垂るゝあり。芝生にはらばふあり。馬に飲かふあり。羊を牧するあり。間々桃花の盛に開けるを見る。十二時四十分佛蘭西に入り、ジューモン停車場にて手荷物の検査を受くるに、田舎の小役人は、何處も變らぬ小面倒を申して、僕が露西亞より貰ひ來れる一斤餘の茶に、ニフラン六十文の税を課せんとす。僕大に怒りて、茶を床上に抛ち去れば、税關の使丁あたふた拾ひ集めて、之を持ち歸る。

佛國に入りて、汽車疾きこと矢の如し。國境より巴里までの間、停車僅に一回。午後四時巴里に着す。馬車を驅つてホテルに向へば、細雨霏々として、路傍の樹木綠葉蒸々

たり。嬉し、甚だ嬉し。(四月十四日夜巴里ノルマンヤ、ホテルにて)

### 巴里日記

●●●四月十四日夕巴里に入る。夜オペラ通りを歩けば、人を赤毛布と見てか、云々の所案内せんといふもの、頻りにうるさく附纏ひ來る。巴里ならではの世界中何處に行かるとも見るを得ざるもの、候ふぞと申す。何處にもあらんほどのものを見比べんすこそ思へ、此處のみにて見得べきものを見るの要ありなんやとて斷わる。

●●●十五日夕、日佛協會の晩餐會に列すべき時刻迫れるに、昨日火災につかはしたる夜會服未だ着せず。疾くせよと宿の男を促せば、やがて洋服屋の女なるべし、年頃二十ばかりの、鄙びたるながらに美はしきが、急ぎ入り來りて頻りに打訛ぶ。見れば五階の梯子を駆け上りたることゝて、息もたえなくなり。其の時は、ふと二千年前羅馬の尙盛な

りし頭を想ひ出で、試みに其の頭の羅馬人の身になつて、此の場の様を盡き見る。——  
あだめきたる羅甸の美人が首を伏して打詫ぶるところ、黄色の日本人が、眼を傾らして  
其の側に突ッ立ちたる姿、嗚呼何等見當のつかぬ取り合せなりけん。

十六日の夕、凱旋門の邊を歩し、ぐるりと門を一回りして、元の道に歸らんとするに、  
行けどもく元のシャンゼリゼの通に出です。程經て、一回りしたりと思ひしは半分回  
りし間違なりしを知りて、再び凱旋門に立ち歸りて、此度は、能くく門の正面を見極  
めて、大通りに下る。斯くて行くこと二哩ばかりにして人に問へば、飛でもない、夫は  
門の後より正面に來玉ひしなるべしとのことに、又悄悄と元の道に引き返す。兎角の往  
復に時を費すこと約四時間、宿に歸れば食堂は既に閉ぢたり。

十七日、エツプニール塔に登る。何さま一千尺の高さにするくと釣り上げられ行く心  
地いはん方なく變なものなり。お菊や高尾や乃至鮫鱈を、こんな所で釣り斬りにしたなら

ば奇抜なるべしなど思ひつく。

十八日、ノートル、ダムを観る。何よりも我が氣に入りたるは、例のバルコニーの装  
飾に使へる奇怪の動物の彫刻なり。大猿の如き奴が、頬杖をつきてべろりと舌を出した  
る最もよし。斯いふ人を馬鹿にしたる面つきの奴が、高さ何百尺といふところから、巴  
里の全市を見下し居るといふは、如何にも僕の理想に合へり。

十九日の夜、グラント、オペラを見る。或人問うて曰く、君は筋も知らず、言葉も分  
らずに居て、夫でオペラが面白かるべきかと。僕答へて曰く、筋も言葉も分らねばこ  
そ、耳目の楽しみはあれ。何もかも理窟が分つては、面白からんやうなし。僕は成程と感  
心せんとて、オペラには、行き申さずと。

二十日、伏見宮御附の岩井ドクトルと語る。ドクトルは、豫て婦人の副乳に關して專  
攻したる人なり。副乳を有する婦人は、概して妊娠すること多く、殊に三十歳前後、屢

ば雙生兒を生むことあり、一體に精神痲鈍にして、且つ肺結核に罹りて死ぬる者多しなど、縁喜でもないことを、さんく聞かせらる。僕の妻なる人も亦憚りながら副乳を有し居ることを、岩井ドクトルは知らざりしなり。

二十一日、ナポレオンの墓に詣つ。杖を預けよといふ。預けに行けば、老女受け取りて、有り難しと禮をいふ。金ならば知らず、人の物を預かりて禮をいはんこと、我邦にはなき所なるべし。

二十二日、巴里の用も終りたればとて、正午此處を出立して、倫敦に向ふ。沿道櫻花咲き亂れて雪の如し。八時ビクトリア停車場に着す。(四月廿三日倫敦ホテル、ビクトリアにて)

### 本記—英

### 隨興記

### 大使宮を迎ふ

「タイムス」のブレイン君に伴はれて、五月六日午後五時、我遣英大使宮殿下の御來着を迎へまつらんとて、ビクトリア停車場に向ふ。さしも悵せく降り續きたる五月雨の、今日ばかりは僅かに霽れて、往きかふ人の面ざしや、春めきて見ゆるぞ目出度き。同盟國の貴賓を迎へんする思は同じ人々の、皆同じ方へと指し急げば、左なきたに忙しきビクトリア街の人通り、雲霞の如しといはんもなかく恐なり。

やうくに人をかき分けて停車場に入れば、御召の列車が着くべきプラットフォーム  
大使宮を迎ふ

には、燃ゆるばかりの猩々緋の毛氈を敷き詰め、その中央に之も同じく猩々緋の色さやかなるを一面に打覆ひて埒を作り、此處を殿下が御少憩の場に充てたり。向つて右の方を内外貴賓の席とし、左の方には、近衛歩兵の愛蘭聯隊第一大隊立てり。例の自さむるばかりの緋羅紗の軍服美はしく、天目の大きやかなるを戴きたらん如き毛冠帽、列を正して長幹轟然矢の如く突ッ立ちたる様、壯麗いふべくもあらず。應て御出迎の人々追々に走せ參じて、埒の内外は燦爛たる金銀の光紅紫の色に充ち満ち、皇族方には、コンノート大公、及前年我邦に渡らせられし同若宮を始め、クリスチアン親王、アーガイル公、フワイフ公など、或は元帥服のいかめしき、或はガーター勳章の鮮かなる、何れを何れとも見え分かず。名ある高官には、首相バナムン氏を初め、元帥ロバーツ、提督シーモア、内相グラッドストーン、外相グレー、其の外我邦の大使館員、陸海軍將校、今日を晴と装ひて控へたる中に、駐日大使マクドナルド氏の長軀の頻りに奔走せるを見た

るは、何とやらん近々しく親しげに見られぬ。

程なく啾啾たる樂聲、「わが大君に幸あれかし」の英國國歌を奏で出づ。ブレイン君、こは英國皇帝の御代理として、皇太子殿下の臨ませらるゝを迎ふるなりといふ。伸び上れども見えず、フ君埒の外に出でよといふ。埒の邊には、警吏立ち添ひて、一人一人を誰何せり。フ君囁きていふ、警吏が立てる間を、傲然として脇目もふらず通り抜けて出でよと。斯くして漸く埒の外に出づれば、皇太子殿下の、今しも首相と手を握らせらるるを見上げ參らす。海軍服に身を固めて、此の日は特に紅藍の色相交りたる我菊花大綬章を佩ばせ玉へる、痛く人目をひき見て見えたり。

午後五時五十分「君が代」の奏樂明々として吹き起ると等しく、我が大使宮殿下が御召の列車は、堂々としてプラットフォームに入り来る。殿下の列車を出でさせらるゝや、英國皇太子殿下、先づ之を迎へられ、次で列み居たる各皇族に御引合せあり。引續きて

各高官は夫々殿下の前に紹介せらる。殿下は、陸軍大將服に菊花大綬章を佩ばせられ、莞爾やかに一々御會釋あり、一同との御挨拶終りて後、長崎宮中顧問官、山本、西兩大將其の他の隨員を從へて、儀仗の兵員が立てる周圍を一巡せられ、直ちに此處を出で、皇太子と御同乘にて、バッキンガム宮に英國皇帝を訪はせ玉ふ。

ヅ君又もや余が手を把りて、さも心得顔に兎ある事務室を心安げに通り返けて、停車場の入口に出づ。此處には、親衛騎兵の一隊、銀光まばゆき胸甲を帯び、白毛のクリニエール長く垂れたる金甲を戴き、三尺餘の長劍を引抜きたるまゝ、肩にして、色列正しき栗毛の馬に手綱を控へて立てるを見る。前驅先走り出づ。第一の馬車には、わが殿下と皇太子コンノート兩宮御同乘あり、次の馬車には、小村大使、山本大將、ロバーツ元帥同乘し、其の次には西大將、長崎宮中顧問官、シーモア提督と同乘し、隨行の各員は、夫々四輪の馬車に分乘す。やがて輿轎たる轍の音と共に、一同停車場を軋り出づれば、

路傍觀る者塔の如く、フーレーの聲に打交りて、「バンザイ」の歡聲を唱ふるものさへあるを聞きつ。

ブレイン君、又余が手を曳きて、群衆を押し分けて、殿下が殿居に充てたるヨーク、ハウスの前に出づ。ヨーク、ハウスは、ヨーク公の舊居、今の皇太子の尙ヨーク公と稱せられし頃住はせ玉ひし所なり。待つこと半時ばかりにして、殿下の御一行バッキンガム宮の御對面を了りて、此處に入らせらる。又待つこと半時ばかりにして、英國國歌の吹奏に迎へられて、英國皇帝エドワード七世陛下御答禮にて此處に臨ませらる。寫し繪にのみ見上げ參らせたるを、今日はしも目のあたりに見上げまらすれば、陛下大元帥の御装ひゆたかに着なして、莞爾やかに打笑ませ玉ひ、一々手を舉げて、兩側に居列ぶ人草の歡呼に答へさせらるゝ様、誠に温乎として玉の如し。斯くて待つこと又半時にして御答訪事なく終りて立ち出で玉ふに、我等も何時までありなんやと、厚くブレイン君

倫敦市の歓迎  
五六  
に謝して、分れて歸りぬ。——平和の神の御子達の、遠く西東に分れ居玉ひたるが、今しも、めぐり合ひて手を握らせ玉ひつ。(五月六日倫敦南ケンントンンの客舎にて)

### 倫敦市の歓迎

今日は倫敦市が我が伏見宮殿下を招じて、歓迎の辭を捧呈すべき日なればとて、又もや「タイムス」のブレイン君を案内に煩はして、共に式場なるギルドホールに向ふ。チープサイドより、キング、ストリートの邊、街頭高く日英兩國の國旗を吊し、五彩の紙片をかけ渡して、賑はしきこといはん方なし。ホールの門前に、兩國の國旗を左右にして、中央に「萬歳」の二字を掲げ出したるなど、殊に面白し。式場に入れば、正面の上段に、市長の椅子儼かに安せられ、古風なる毛皮裏のマザリン、ガウン着たる市會議員の、細長きワンドを杖つきて、彼方此方に奔走するを見る。追々に走せ參する來賓、

彼方に一席を占め、此方に二席を塞ぎて、十二時過ぐる頃には、はや薙々と階上階下に廻れし。

十二時二十分數聲の喇叭院々として、響き渡れば、樂手を先頭として、市會議長及市參事會員之に次ぎ、市長及市長夫人、靜に列を正して入り來る。市長の前には、メースを持てるものと、長劍を捧ぐる者と立てり。正義と權威とを表するなりと、ブレイン君語る。市長は金色燦爛たる大のガウンを被り、菱形したる黒毛の帽子を戴けり。其の樣いとゆゝし、市長が設けの席に着くと同時に、主なる内外の來賓が名を讀み上げぬ。讀み上げられたるものは、一人々々、市長の側に進みて、之と手を握りたる後其の側に立つ。兩側に居列ぶ者は、拍手して過ぎ行く人々を見送る。

嗚呼、其の肅々として、市長の前に歩み寄る人々の装ひの、目ぐるしき迄に様々なるを見ずや。さらびやかなるは、金銀の光燦として人の目を射り、あざやけきは、紅紫の

色どり五彩も管ならず。長劍愛々として、地に曳くあり。高冠兀として、天に冲するあり。昂々然たるあり。懽々焉たるあり。英姿颯爽たるノーエル大將來ると見れば、温容童顔仙に似たる美術家アルマタデマ君至り、伊集院大使館参事官の金モール美はしき我が大禮服を送れば、瀟洒たる貴公子ソールズベリー侯爵を迎へ、キネアド卿が天鷲絨のガウンに白色の襟、外務大臣サー、エドワード、グレーが僅に金色を彩どりたる黒の上着に細身の劍、坂田總領事の色白く若やかなる、アームストロング卿の顔赤らかに足の艱める、市書記が眞紅の長衫、クハンス、ウエストミンスター義勇兵隊長が金銀を飾れる風色の軍服、誠や百花研を競ひ、日月光を争ふとは斯る事にもやと見てある程に、我東京駐劄英國大使サー、クロード、マクドナルドの名高らかに讀み上げらる。偕こそとふり返れば、之は又思ひ切つたるものかな。先生此の日の扮装は、其の昔勤めたりける蘇格蘭聯隊大佐の軍装として、膝にも達すべき毛織のタータンを、左の肩よりすらりとぶ

ら下げ、凡そ三寸四方もあるべき大格子縞の模様ついたる暗緑色のズボンを穿ち、目さむる許り色さやかなる我旭日大綬章をぞ佩びたりける。引續いて、カンタベリーの大僧正、地を這ふばかりの狸々緋の大ガウンに、純白雪の如き兩袖ついたるを着なして、徐徐と入り来る。之より後、尙幾多の人の入り来りけん、今一々には記えず。兎角するほどに、件の上段の一區は、市長を中にして金銀紅白、十重二十重に取り圍み、見上ぐる穹窿形の天井を背にして、左ながら一幕の活人畫を見るに似たり。デオシー君、ひたひたと近づき来て、余に囁きて曰ふ、見よ、是れ全く生きたる人名辭書の口畫と。

一時十五分、市長以下市吏員に迎へられて、英國皇太子殿下、コンノート大公及アーサー親王と共に此處に臨ませらる。程なく、樂隊の「君が代」を奏するを聞く。一同すほとかばりに立ち上れば、市長、市會議長、参事會員其他市吏員、皆ホルルの玄關に出で、我が大使宮殿下を出で迎ふ。斯くて喇叭手を先頭として、市吏員一同之に次ぎ、殿下の隨

倫敦市の歓迎

員を中に皇太子殿下、コンノート兩親王を次に、例の長劍とメースとを左右にして倫敦市長、之に導かれて、伏見宮殿下御入あり。殿下は陸軍大將の正装に、パスの十字章をぞ召されたる。此の行列の高壇に進み行く間、ホールの左隅に屯し居たるヨーク公陸軍幼年學校の少年一齊に日本語にて「君が代」を唱ふ。律呂相諧ひて、外人の聲とも覺えず。

行列、盡く高壇の上に登りて、夫々の席に立てる頃を見計らひ、市書記歓迎の辭捧呈の決議を朗讀し、記録長、尺餘の黄金の函に收めたる歓迎の辭を朗讀す。其の全文左の如し。

伏見宮殿下に白す。

我等倫敦市長、助役及市會議員は、殿下が我が敬愛せる君主の最も顯貴なる同盟國たる日本天皇陛下の代表者として、當國に來朝せられたるを機とし、此に誠實なる

歓迎の意を殿下に表す。

貴國の勢力が、迅速に増進して、僅々一代の間に能く世界列國の間に第一流の地位を占むるに至りたるを見たるは、倫敦市民の齊しく快とする所なり。

貴國の帝室は、二千五百餘年一系の帝統を繼ぎ、貴國の人民は、今日科學文學美術及武道に於て、天下に秀でたり。

我等は、強大なる、文化遍き、一帝國の代表者として、殿下を歓迎す。世界の商業的首府の市民として、我等は、我等が敬愛せる國君と、殿下の顯貴なる皇帝との間に締結せられたる同盟が、亞細亞の文明と世界の平和とを進むるに足るべきを想ひて、歡喜に堪へず。今の此の古きギルドホールは、從來幾多の莊嚴なる式典を擧げたりと雖も、未だ曾て東西の結合を表し、文明の勝利及二大國民の政治家の賢明と明察とを證すると、今回の如く重大なるを見ず。

倫敦市の歓迎



倫敦市の歓迎

終りに臨み、殿下の大なる、高尚なる、國民の勇氣と忠愛とに對して、滿腔の敬意を有せる倫敦市民は、日本皇帝の長へに幸福繁榮に在さんことを切望せる旨を、明かにせんと欲す。

余が譯文は拙しと雖も、大要其の意に於て誤りなきを信す。斯くて、殿下は此の歓迎の辭を納められて後、陸奥大使館書記官をして、左の英文答辭を朗讀せしめらる。

市長及諸君、余及余が齎せる使命に對して、然く鄭重なる歓迎を受くるは、余の深く市長及諸君に謝せざるべからざる所なり。

又余は、然く幸に此の強大なる國民と同盟を結ぶに至れる余が本國に對して、歓迎辭中に表せられたる深厚寛温の情に、余が謝意を表せざるべからず。過去幾歲、此の崇高なる式場が、屢著名なる外客歓迎の場たりし由は、余の今聞

くを得たる所、而して、余が實に日本の使節中、初めて此と同一の名譽を得たる者なることを誇らんとす。

余が、此の宏大なる都市の大を證しつべき此の大首府の中心に来れるは、余の特に快とする所にして、美なる金函、及之に收めたる高貴の品は、嘗に余が來朝の好紀念物たるのみならず、又永く我が家の珍寶たるべし。

此に、再び、諸君が余に加へたる光榮を謝するに當り、希くは、余をして、更に之に、倫敦市の福祉及長久の繁榮を切望するの意を附加せしめよ。(大喝采)

右終りて後、歓迎の辭の發議より、決議に至れる迄の形式を演じ、之にて式全く終了し、殿下は、隨員と共に、前の行列に送られて、肅々として此處を出で、更に市長官舎なるマンション、ハウスの午餐會に臨ませらる。

マンション、ハウスは、ギルドホールと相距ると一丁許。幸く其の間の雜沓を切り抜

倫敦市の歓迎

けて之に入れば、宴會場は、卓子を八列にして、二百七十餘の客席を設けたり。珍味山の如く、美酒泉に似たり。宴は二時に始まり、四時に至る。宴中、市長の發聲にて、日英兩國皇帝の爲に祝杯を擧ぐ。宴終りて、殿下隨員と共に此處を辭せられたる後、人皆ラウンチに集まりて、快談湧くが如し。久々にて、ノーエル大將と相見て、手を握りて、前年のダイアテム艦上の會見を語る。デオシー君、様々の人に、余を紹介して、一「有名なる」を浴せかく。「大阪毎日」のモリス君と初めて相見しに、「公には勁敵なる由なれど、私には何分宜しく」など戯る。ブレイン君に紹介せられて、前市長デムスデール卿と見る。卿に紹介せられて、又現市長と挨拶す。市長は今日の盛式の滞りなかりしを語りて、喜色面に溢れたり。

五時ブレイン君と共に「タイムス」社に歸る。行人皆目を蔽て、余が顔を見て、何やらん囁き合ふ。今日といふ今日、日本人の珍重せらるゝこと一通りならず。快甚だし。

(五月十日夜倫敦客舎にて)

觀兵式を觀ざる記

起き出で、見れば、細雨蕭々として、煙の如し。今日は、わが伏見宮殿下の爲に、英國皇帝親ら兵をオルダーショットに觀玉ふべき日なり。

僕は實に如何にすべきかに迷へり。

謂ふこと勿れ、是れ私事を語るものと。僕はわが同盟國の同業及官憲が、如何に一介の記者を懇遇優待したるかを、廣く我が國民に報せんが爲に、姑らく其の僕が迷へる所以を略叙せざるべからず。初めオルダーショット觀兵式の舉あるを聞くと、僕は再三其の參列券を得んことを、我が大使館に懇請したり。不幸にして、わが大使館は「一切の野次馬」を拒絶せん考へとかにて一向取り合ひ呉るゝ様子なし。僕乃ち、一日、之を

觀兵式を觀ざる記

觀兵式を觀ざる記

「テレグラフ」のロートン君に語る。ロ君又「トリビューン」の次席主筆なる其の兄に語る。兄なるロートン君、之を以て、以ての外のこととして、僕に知らせずして、直に書を陸軍省に送り、直接に僕が爲に式の参列券を求め呉れたり。越えて數日、陸軍大臣秘書官クリディー氏は僕に宛て、懇到なる案内状を送り、單に僕の爲に特別の拜觀席を設けられたるのみならず、何時何處發の特發汽車に乗り、何處に下りて、何の切符を示さば、僕は滞りなく馬車にて式場に送られ、而して式場に至らば、何某大佐僕を出迎へて、特に僕一人の爲に設けたる特別席に僕を案内して、一切萬事の世話を焼くべきかなどいふ細々しき注意を與へ、之に添ふるに、汽車の時間表、式場の圖面、注意事項の印刷物、其の他の必要なる敷葉の切符を封送せられたり。僕は、其の注意の到れり盡せるに殆ど感泣せり。然るに、昨日に至り、わが親愛なる「タイムス」の主筆は、急使を飛ばして、僕に一書を寄せ、今日の觀兵式には、「タイムス」より例の有名なるジェームス大尉

特派員として出張し、僕の爲に一切の面倒を見るべき手筈を整へおきたれば、午前十時迄に、オルダーショットなる常置通信員フーパー大尉の宅に落ち合ふべしとあり。實は倫敦より大尉を同行せしむべき筈なりしが、誤つて大尉の先發したるは、遺憾なり。されどもフーパー大尉の宅は、極めて分り易き所なれば、格別見出し難きことはあらざるべしなど、之に書き添へ、其の停車場よりの道順及距離を示し、熊々町名の發音をまで之に加へあり。劇務匆忙の際、此の注意を加へ来るを見るに至りては、僕豈に再び感泣せざるを得んや。僕は實に、何れの道を取るべきかに迷へり。

僕遂に意を決して、陸軍省の九時十八分發特發列車を乘て、八時半の普通列車に乘じて、オルダーショットに向へり。着後、直にフーパー大尉を訪へば、ジェームス大尉待構へて、今しも停車場迄出迎へに行くべき相談中なりきといふ。さりとて、僕の汽車の到着時間を、如何して知り玉へると問へば、大尉は、昨夜二通の電報を接手したるに由

親兵式を觀ざる記

るといふ。僕は實に、此の電報を見るに及びて、感泣といふよりも、寧ろ喫驚したり。一通は陸軍大臣秘書官より「タイムズ」社に宛てたるものにして、其の文に曰く、當省には、貴社の特派員が、明日オルダーショットに、日本特派員杉村氏を同行すべき由、聞知せり。余は同特派員の爲に、一切の手筈を整へおきたれば、貴社の特派員にも、同一の待遇を與ふべきか云々。今一通は「タイムズ」社よりジェームス大尉に宛てたるものにして、其の文に曰く、東京朝日新聞特派通信員杉村氏の爲に、凡そ貴下の力に能ふべき限りの好意を表せらるべし。同氏の倫敦宿所は、某々の地と、——陸軍省が、如何にして、僕のジェームス大尉と同行すべきを聞知したるか。誠に以て喫驚の外なくんばあらず。

斯くて、此處にて朝食を喫し、三人打連れて、親兵式場に向ふ。細雨尙霏々たり。停車場前にて、陸軍省の馬車に搭せんとすれば「貴下が「朝日」の特派員なりや」とて、係り

の士官懇切に世話せらる。豫め内訓の届き居たるものに似たり。馬車式場に近づくに従ひ、雨全く霽れて、來觀の士女、絡繹として織るが如し。式場に入るに及びて、僕の所謂特別席はと見れば、玉座の真下なる廣場に、一脚の椅子を、わざ／＼僕一人の爲に備へ呉れたるなりき。斯くして、僕は英國の新聞記者ども、享受し得ざる特權を付與せられたるなり。

不幸にして、此の日の親兵式は中止となりたれど、僕は此の手厚き待遇に満足して、聊かも失望することなくして、此處を引上げたり。歸途兩大尉と午餐を共にして、日暮れなんとする頃、倫敦に歸る。(五月九日夜倫敦客舎にて)

親兵式を觀ざる記

ポーツマス

一

余は、今戦艦ドレッドノートの甲板に在り。

宮殿下ポーツマス御成の日に先づこと二日、余は頼み難き人を頼まんよりはと、直接に一書を海軍大臣に致して、參觀の許可を求めたり。越えて一日、ポーツマス司令長官より電報あり。曰く、明日午前十一時、一將校と馬車一輛とを、停車場迄出迎に出しおくれしと。「タイムス」の特派員フレッチャー中佐、亦本社に接したりとて、書を飛ばして、停車場前の某ホテルに會見せんと申し来る。五月二十四日、豫期の如くポーツマスに至れば、果然グールデン大尉の待てるあり。フレッチャー中佐、亦ホテルの門前に立てり。乃ち三人相携へて、鎮守府の馬車に搭じて、今しも當ドレッドノートへ

とは來れるなり。

待つこと時餘、宮殿下の一行を載せたる特發列車は、軍港停車場を過ぎて、驛直にドレッドノートを横附にせる棧橋の上に進み来る。是より先、棧橋の上には、海軍海兵隊の緋羅紗の一行を先頭に、水兵の中に、同じく海兵砲隊の音楽手を右にして、孰れも威儀儼かにさし控へ、艦上には、満艦飾を施し、檣頭高く日章旗を掲げ、水兵の、一部は舷に立ち、一部は甲板に列びて、御迎へ申し上げ。殿下の御着車と同時に、樂隊が「君が代」の奏樂あり。殿下は、隨員と共に車を出でられて後、儀仗の水兵海兵を巡覽せられ、終りて、軍港の高級武官及市吏員に謁を賜ふ。此の間、棧橋に控へたる寫眞師の一行は、脚立やうのものに登りて、八方に目を配りて、寫眞機をばちつかすること甚忙しげなり。フレッチャー中佐笑つて曰く、今夜若し倫敦に歸りて、パレーヌなどの寄席に行かば、必ず君や僕の顔が、活動寫眞の中より現れ出づるなるべしと。

ホーツマス

七二

殿下は、設けの階段を上りて、ロバーツ元帥小村大使山本西兩大將其の他と共に、艦上に入らせ玉ひ、艦内隈なく御巡覽ありて後、此度は海に向ひたる左舷の上甲板に出でさせらる。今朝よりの雨は、早く霽れたれど、尙いぶせく打ち曇りてありし空の、此の時に至りて、初めて日の光を洩し來る。見れば前面には、近くヨット二隻と水雷母艦一隻、其の右には山の如き給炭船が、赤子の乳を含める如く寄り添ひたる巡洋艦一隻と立ち並び、左の方遙に前世紀初の艦型いと珍らしき、ネルソンの坐乗艦ビクトリーを見る。其の外の大小艦船、雲に入り霞に隠るゝ限り、滿艦飾を施し、日章旗を掲げざるはなし。

須臾にして、艦尾の方より、怪しき形したる船の、一隻二隻相續いて、殆ど半打沈めるが、追々に走せ來る。新舊各型の潜航艇を、殿下の御覽に供せんとてなり。初に來れるは、四隻、船體半水に在り。海波を斬つて突進し來る。次に來れるは、やゝ舊型の四

隻、僅に司令塔のみを水面に露はして、順序正しく徐々と走せ近づく。之に次いで、一隻又一隻、皆ドレッドノートの前部、殆ど艦側を掠めんばかりの所を、すれ〜に過ぎて行く。其の一隻も全く沈み終らざりしは、沈むべき筈なりし船の機關に故障ありて、沈み損ねたるなりといふ。潜航艇の御覽終りて後、殿下は隨員と共に、棧橋に出でさせられ、此處より馬車に搭じて、海軍兵舎の方に赴かせらる。御見送りは、御出迎の時と同じ。

フレッチャー中佐は、本社へ電報せんとて、そ〜に去りぬ。余等も亦去るべきか。

一一

グールドン大尉と、馬車を驅つて、海軍兵舎に午餐を喫し、殿下の後を追ひて、遍く軍港内を巡り見るに、凡そ港内の艦船、其の水に浮べると、船渠の中に在るとを問はず、

ホーツマス

七三

幾百千盡く滿艦飾を施し、日章旗を掲げざるなく、快観いふべからず。三時頃、一汽艇に乗じて、ピクトリーに至る。古き型として、中甲板以下天井低くして、直立すべからず。上甲板に上れば、當年トラファルガー戦役の當時用ひたりてふ帆木綿を延べたり。舷頭には、ネルソンの遺骸を運びたる短艇を安じ、其の少し後の方に、長さ七八寸の真鍮板を、甲板に打ちつけて「千八百五十年十月二十五日、ネルソン提督此に休る。」と記しあり。當時の様目に見るが如し。下りて、中甲板に至れば、兩舷側には昔のまゝの大砲を列べ、とある一間には、其の頃の新聞紙繪畫など陳列したり。百年前の「コーリア」が四號活字にて。

「我等は、吉報と凶報とを併せて、此に公にせざるべからず。昨日トラファルガーに於て得たる我が軍の奇捷と、同時にネルソン提督の戦死したること、是なり。」云々と報じたる原紙、其のまゝを存したる、殊に面白し。我等が此處に入れる時、恰も宮殿

下の此の船を去らるゝ時に會し、皇禮砲の響き、小さき艦内に漸き渡りて、一發毎に艦體の打ゆるぐを覺えたり。禮砲終りて、樂手の「君が代」を奏するが引續いて聞ゆ。耳を聳せんずる砲聲、一たび已んで、嘔吐たる樂聲直に之に次いで至るは、雷雨一過して、新月を晴空に望むにも似たらんか。「君が代」の奏樂中は、側に立てるグ大尉、肅然として舉手の禮を行ひ、樂終るまで改めず。見る人なしとて、苟もせざることを、誠に欽するに堪へたり。

更に下りて、下甲板に至れば、黒暗の中に、蠟燭處々に灯し列ねたり。グ大尉と暗中を摸索して、右舷の方に至れば、此處に綱張り渡して、花輪を手向けたるを見る。曰ふ、是れネルソン卿終焉の所と。卿が痛手を負ひて、此處に運ばれ、小暗き蠟燭の火の下に、醫官の看護を受けたる様の、如何に悽愴なりけん。惘然として立つこと少時。時移りてはと促されて、此處を去る。

今正に午後九時半。

ピクトリーを出で、後、ホエール島の砲壘を巡視し、七時發の汽車にて、今しも初め  
て倫敦に着けるなり。今更宿に歸ればとて、食事の時間はとくに過ぎたり。已んぬるか  
な、之より日本俱樂部に行きて、一盞を舉げて後、球を突かんには如かじ。

(五月二十四日)

鎌倉にありし時、夜深けて虫の羽叩く音しきりなりければ、何事やらんと出て見し  
に蟬一羽蟻螂に捕へられたるなりけり。其の蟬、啞なりしかば聲を得立て、唯羽音の  
みして救を求めたるなりき。——七花八裂

# 倫敦小品

## 夜會の歸り

ハイド、パーク、ホテルで催された小村大使のリセプションで、いざ歸らうといふ時、  
元「クロニクル」新聞の從軍記者であつたリンチ君が、無理に僕を食堂へ引ッ張り込んで、  
是非日英同盟の萬歳を祝しやうといふので、うかと釣り込まれて、三鞭を三杯續けさま  
に傾けた。之が恐ろしく頭に答へて、いつになく酔拂つて、殆ど夢中で戶外へ出る。  
居合せた辻待馬車に飛び乗る。御者が何やらくどくどと行先を尋ねるのを、宜加減に  
挨拶して、ナイツブリッチの通から南に向ふ。車の揺れる度に、シルクハットが、釣り  
上げた車の兩戸に觸つて、誠に氣がおける。今日折角火災しにやつたものを、又しても

夜會の歸り

七七



一夜の中に兇犬のやうにしては、宿に歸つて主婦と同宿の客に冷かされるのが、聊か面目ない。成るべく居すまゐを正して、頭を戸に當てまいとやつて見ても、例の日英同盟が何時までも祟つて、直ふらくと来る。成程、夜會の帽子を、クラッシュ、オペラに限るのは、此處の道理に基くのだと、思ひついて、大に感心する。

車中のお客が、斯やうに日英同盟の祟りから、クラッシュ、オペラの原理に至るまでの外交的人類學的の研究を、是れ事として居る間に、馬車は、どんくるとアスファルトの滑々した大道を、蹄鐵の音勇ましく進んで行く。街道には、街燈が、うすら淋しく、きら／＼と光つて、往來は殆んど絶えて居る。此の往來の殆んど絶えた真夜中でも、御者は左側々々と道を取つて、とある曲り角には、真直に横きつたとて、誰一人見て居る者もないのに、矢張り、左側から態々一つ大曲りに車を曲げて通つた。一馬丁に至る迄、此の通り、英吉利人の英吉利人たる所を存して居ると、僕は深く感心した。日英同盟は

外交上の問題ばかりでない。——無論三鞭ぢやない。

宿の前で車を下りる。無論前以て賃錢は定めなかつたが、一志拂ふ。夜深だからとか何とか増賃を求めると思つたら、彼は一寸帽子に手をあて、「サンキュー、サー」と丁寧挨拶して行く、何處迄も英吉利人だ。戸を明けて入らうとすると、門に巡查が立つて居る。僕を見て、つか／＼と歩み寄つて、軽く一禮した後、横側の窓が一つ明いて居るから、一寸御注意申し上げるとのことであつた。世に倫敦の巡查ほど、可愛らしいものはない。孰れも雲突くばかりの大男で、ヘルメットに八字髭頗る儼しいが、其の優しいこと、丁寧なことは、逆も我が東京の巡查も及ばぬ。此の前にも、或る日本の畫工が、チームスの岸で、頻りにスケッチをやつて居たら、そんな低い處では景色が能く見えまいと言つて、軽々と兩手で此の畫工をさし上げて、とある水難救濟所の屋根へ載せて呉れたさうだ。昨日もアールスコートの停車場で、新聞賣の小僧が、一寸手を舉げて

敬禮すると、巡査は満面に笑を湛へて、「ハッ、アー、ユー、サー」と来たものだ。

巡査に注意された窓を閉めて、自分の部屋へ手さぐりで入る。電燈は消えて、黒白も分かぬ暗だ。此の時丁度十二時半。

留守の間に、部屋はちやんと片づいて、一物の引き散したもない。僕の部屋附の女中は、頗るの美人で、馬鹿にきらやうめんな女だ。此の宿へ来た日、毎朝八時に起せと言つておいたら、一分も違へずに、八時には必ず起しに来る。衣物を疊む。寢床をしまふ。部屋を掃除する。暖爐を焚きつける。凡そ定つた用事は、言はれぬ前にきちんとして仕舞つて、殆ど全く口を利いたことはない。聞けば、英吉利の女中は、皆さうださうな。此の宿へ初めて来た時、呼鈴の備へがないと苦情を言つたら、居合せた友人が打笑つて、當地では、下女の方で何もかも心得て、ちやんとして呉れるから、殆ど呼鈴の必要はあるまいと言つた。成程其の通りだ。矢張り英吉利だ。

窮屈な燕尾服を脱いで、寝衣に着かへると、初めて我に歸つた心地。白キッドの手袋一つ、大事に箆笥の中に仕舞ふ。之はさる所の夜會で、片方を失つた以來、何處へでも片方だけで済まして居るのだ。兎角して、臥床に入つたは、彼此一時過。外には、また時々馬車の音が聞える。(五月十五日サウス、ケンシントンの客舎にて)

今日は、リゼント公園で、カート、ホース、ショーがあるから、見に行きませぬかと、十三になる可愛い隣の部屋の獨逸人の娘が誘ひに来る。いや隣の部屋の獨逸人の十三になる可愛い娘が誘ひに来たのだ。一體、其の喘息やみが痰を吐きかけて已めたやうなカート、ホース、ショーとは何だらうかと聞くと、之は倫敦中の荷馬車の馬の共進會見たやうなもので、優れてよい馬には、賞金賞牌を與へるになつて居る。馬の待遇を

カート、ホース、シヨ

よくし、良馬を養はせる習慣を作るのが目的ださうな。格別面白さうにも思はれぬが、折角可愛い十三になる隣の部屋の獨逸人の娘が誘つて呉れたことだから、早速一緒に行くことに承知した。

同行は、例の娘と、其の父と、今一人之も矢張り同宿の英吉利人で、一行四人、地下鐵道でペーカー街へ出る。もう此の邊から一杯の見物人だ。雑沓をかき分けて、公園の方へ行くと、成程、荷馬車が續々と来る。馬は孰も逞ましい大きな奴ばかりで、之に今日を晴と紙片やらリボンやら金具やら、様々に飾り立てゝある。中には、前回のシヨに貰つた賞牌を幾つとなく吊したのもある。車の上には、乾物屋、小間物屋、八百屋、荒物屋、牛乳屋など、夫々其の車に關係をもつた労働者が、女房子供と一緒に乗り込んで居て、何かは知らず頬ばつて、口をもぐぐさせながら、笑ひさゝめき合つて通る。如何にも陽氣だ。

兩側は、一面の群集で、殆ど身動きもならぬ位。馬車の通り行く毎に、口々に「宜い馬だ」とか、「何處産だらう」とか、「太り過ぎて居る」とか、「足が長過ぎる」とか評し合ふ。賞牌を吊し列べた馬でも来ると、誰始めるとなく喝采の聲を上げる。車上の御者が、得意氣に鞭を上げて、答禮の眞似をするのもある。實をいふと、我輩日本の江戸ッ子に、馬のことは一向分らぬが、此の邊の者は、小僧でも女でも、皆能く馬を知り、馬に馴れて居て、いろんなことを言ふ。言ふばかりか、いろんなことをする。

何した拍子か、雑沓で馬車が數十臺、一度にはたと立ち止つた時、つい僕の前に居た十歳ばかりの男の兒が、ひたくと馬の傍へよつて、さも可愛げに馬の顔を撫でゝやる。馬も亦可愛げに、子供の顔を見下して居る。丸で畜にかいた様だ。其の中、二人連の若い娘が来た。道を彼方へ横ぎらうとしたが、生憎馬車がぎっしりと押しつまつて、出る口がない。日本なら、恐々馬の側に立つて待つ所だが、此處らの娘は心得たものだ。何

カート、ホース、シヨ

カート、ホース、ジョー  
八四  
やら馬にからかひながら、一寸轡の所を掴んで、其の鼻面を脇に寄せながら、辛く身を入るだけの空地を作つて、安々と通りぬけた。其の様が如何にも態とらしくない。僕は大に感心した。成程之ほどに、一般の人が馬に興味を持つて居てこそ初めて馬匹の改良も行はれる。ガラ札を命とする半博徒を相手として、幾百の競馬場を作つたとて、何になるものかい。

感心したのは之ばかりでない、此の身動きもならぬ大群集の中に、混雑といふことが全くない。押しもせぬ、押されもせぬ。急ぎ足で前の人をつきのけて行かうとする者もなければ、摺れ進ひさま打つかり合ふ者もない。乳呑兒を抱いた妻君が、平気で人ごみの中を歩けば、病人を乳母車の様な車に載せて、徐に之を押し歩いて行く者もある。偶少し込み合ふと見ると、巡査が丁寧に車の前に立つて群集を制する。制せられた群集は、たち／＼と後に退つて、道を譲る。若し夫れ、查公一たび手を舉げて合圖を傳ふれば、

一言を費さずして、百千の車馬、ひたと一時に進行を止めて、徐に次なる合圖の下るを待つ。誰一人苦情をいふ者はない。

賞品の授與は午後だといふので、之は見ずに仕舞つた。歸り途に、同行の獨逸人と英吉利人と例の娘までが一緒になつて、頻りに馬の評をやつて居る。僕にも分るかといふから、僕は、鹿なら心得て居るが、馬は一向知らぬといつてやる。娘は目を丸うして、『アラ、そんなに澤山日本に鹿が居て?』といふ。今更騎虎の勢、さうでないとも言はれなくなつた。此の娘が大きくなつて、日本へ來たら、僕は一番に奈良へ案内する積だ。

(五月二十日倫敦客舎にて)

### ムーア、ゲートの敗墟

今日は日曜といふので、倫敦市中はばったりと火の消えたやうな静かさ。店といふ店

ムーア、ゲートの敗墟

ムリア、ゲートの敗墟  
八六

は煙草屑位を除くの外、盡く鎖され、仕事といふ仕事、殆ど一として休みならざるはない。随つて、人通りも至つて少く、馬車の音も偶に聞ゆる許り。電車汽車の發着さへ、日曜には其の数を少くする。ワシントン、アーピングが倫敦の日曜を叙して、「此の日に限つて、犬も餘り吠えない。」と言つたのは、まんざら偽でもなさうな。僕は今、神戸の「ジヤパン、クロニクル」の主筆ヤング君と、倫敦のまん中の、シチーのまん中の、ムリア、ゲートの邊に立つて居る。平生ならば、此の邊は雲を凌ぐ大厦高樓の間に車馬絡繹、來往の士女織るが如く、誠に天下の繁盛股脈を極めて居る所だが、今日はどんよりと曇つた朝寒の空に、道行く人も稀なれば、馬車の響も、極めて疎らにしか聞えぬ。靜かなること、左ながら太古の如く、之が倫敦のまん中とは、何しても思はれぬ位。

此のムリア、ゲートの大通りの片側に、僅に残つた羅馬時代の倫敦市の城壁の敗墟がある。長さ僅かに五六間。黒色の堅い石で固めたもので、上の方には、近世になつて築

き加へた煉瓦の壁がある。昔の墓地であつたとかで、鐵柵儼かに結び回らして、人を近づけぬやうにしてある。ヤング君の話によると、此の邊が即ち羅馬時代の倫敦市の境目で、ムリア、ゲートの名は、之から先、一面の沼池があつて、其の側に市の城門があつたから出たのだといふ。

京極のさんざめく賑しい町が、昔は京の極であつたと聞いて、異様の感慨を禁じ得なかつた僕は、此の倫敦市の中心が、昔の倫敦の町外れで、其處が一面の沼であつたのだと聞いては、如何にも言ふべからざる一種の感慨に堪へなかつた。羅馬人の占領した頃といへば、今から千八九百年の前、英國はまだブリトン人時代であつて、今しも、此の邊に益々して居るサクソン、ノルマンの流れが、殆ど影も見えなかつた頃である。爾來幾變遷、北人の世となり、アングル人サクソン人の領土となり、はては、ノルマン人の天下となつて、テームス河畔、蘆葦迷々たりし當年の文字通りのストランドが、今

ムリア、ゲートの敗墟  
八七

下院の議場

や其の名ばかりを留めたストランドの大通りとなつた倫敦の賑ひのたゞ中に、此の古城壁は、依然として、半ば埋もれ、半ば苦むして、存して居るのである。

脚躰低徊、僕は殆ど去るに忍びなかつた。何とやら、此の静かな町の様が、一時倫敦を二千年前の昔に還して見せるのでないかと思つた。嗚呼あの煉瓦の五階作りの家の下には、釣を垂るゝ子供が居たらう。又彼の新聞賣子の立つて居る停車場脇の廣場は、妙な法衣を着たドイツの坊主がうろついた所かも知れぬ。

雨がぼつ／＼と降つて來た。(五月十九日ロンドンにて)

下院の議場

僕は今、倫敦「デリー、メール」の社主ノースクリップ卿の紹介で、其の弟に當る下院議員ハームスジョース君に導かれて、下院の傍聴席に着いた。

テームス河畔に聳ゆる、居然たるゴシック風の大建築を見た時は、何な立派な議場か其の中に在ることかと思つて居たが、入つて見て、其の存外に小さく狭苦しいのに驚いた。議席はといふと、唯長いベンチを兩側に幾列か列べたばかりで、デスクも、テーブルもない。中央の政府委員席と言つた所が、唯前の方にあるといふ迄で、之も腰掛を列べた切り、演壇と言つて、別に高々と仕つらへたものもなければ、議長席とても、餘り普通の議席より高い所にあるではなし、新聞記者席と速記者席とは、議長席の後の二階にちよんぼりとあるばかり。傍聴席は二階にもあるさうだが、僕の導かれたのは、何でも特別席とかで、議席の直後に、議席と殆ど相列んだ所に在る。議席に居るハームスジョース君が、時々其の傍へ來て、小さな罎を隔てゝ、何かと議場の模様を説明して呉れた。其の無造作なことゝいつたら、氣の利いた日本の村會だつて斯なことはない位、僕は面喰はざるを得なかつた。

下院の議場

が併し、此の無造作な中にも、流石に英國一流の秩序は、整然として一絲亂れず立つて居る。此の小さい狭苦しい議場に、之ほどの多人数が押し詰つて居ながら、我邦の議會の様にざわ／＼した所は一點もない。私語する者は、極めて聲を低うして語る。立ち歩く者は、爪先だけを踏みぬめて扱足で歩く。議場に入出する者は、出入毎に、必ず帽子に軽く手をかけて、議長の方に黙禮する。議員の演説は、盡く議長に向つてすることとなつて居るので、相手の議員を一々三人稱に置いて、必ず「名譽ある紳士」と呼びかける。他人が演説する間は、肅然として謹聴して、「馬鹿野郎、引込め」などは愚か、咳拂ひ一つする者もない。僕が傍聴中、丁度蘇格蘭の財政に關する討議があつて、反對黨の首領前首相バルフル君も演説すれば、少チェンバレンもやり、アスクホス卿も辯じた。中にも、チェンバレン君の演説は、随分手厳しく政府を攻撃したもので、數字を列べ立てゝの長演説である上に、夫が、チ君の例の調子で、時々せき込んで、吃々とし

て言句に塞へることがあつたから、日本なら、面白くもない少數黨の反對演説、半分も終らぬ内に、無用々々の聲に壓せられたに相違ない。所が、流石に英國の下院は、孰も此の小五月蠅い長演説にも、敬意を表して、黙聴して居るばかり、一言半句の評語をさへ下さぬ。負けるに定つた反對演説を、おめす應せず辯じ立つる者もえらいが、之を聴いてやる多數黨の雅量も亦甚だ欽すべきである。總じて議員の態度が、口舌の上の討論を事とするのでなくして、如何にも一國の大問題を誠實に討論して居るらしく見える。議員とさへ言へば、酒色に沈溺する者、賄賂を貪る者、高利貸に窘めらるゝ者と、略相場の定まつた何處やらのと比べて、英國のエム、ピーが到る處に推重せらるゝ理窟も、略之で分つた。

やがて此處を辭して出やうとする途中、不圖出口を見失つて、飛でもない方角にまごまごして居ると、白髮の鬚儼かに戴いた守衛が、徐々と歩み寄つて、「失禮ですが、出

三等客車  
口がお分りにならないのでは御座いますまいか。夫なら私が御案内致しませう。」と言つて呉れた。

僕は記憶して居る、一昨年の冬、僕が衆議院の遊撃隊を勤めた頃、議場の入口を間違へて、守衛に小言を食つたことがある。其の時の守衛の仰せられるやうに曰く、「コラ、そんな所から上つてはいかん。」——僕は一縮みに縮み上つた。(五月十三日)

### 三等客車

オリバー、クロムウエルの生地、ハンチンドンに用があつて、キングスクロース停車場から、汽車に乗る。例に由つて、先づ三等の切符を求めて、然るべき客車もがたと捜し廻ると、生憎お客が一杯。やつと、喫煙室に一空席を見つけ、腰を下せば、今迄新聞を讀んで居た隣の先生、急に居住ひを正して、席を譲つて呉れる。「有難う」といふ言

葉は、我知らず出て来る。車掌が来て、切符に鉄を入れる。僕の顔を見て、にこ／＼と如何にも愛想よく打笑ひながら、「此處は込み合ひますから」と言ひ出したので、僕は「懷中物御用心」と来るかなと思つて居ると、「隣の室にお移り下さい」といふ。隣の室に行けば、品の好い夫婦が一組居るばかり。僕は英國式に一寸帽子を取つて、御免下さいと言ひながら、其の側に席を占めると、之はしたり二等だ。一寸驚いて、此處迄送つて来た車掌に注意する。車掌は自分の帽子の徽章に、軽く人差指をあてながら、「私が承知して居ります」といふ。「有り難う」の語が、又もや思はず口を滑り出る。車掌が其の職權内の全力を盡して、此の「遠人を懐柔」した譯である。

僕も倫敦に來た當座こそ、汽車は一等に限るものと心得て居たが、或日地下鐵道を乗り過して、ウトンブルドンに行つた時、圖らず三等の客車に乗つて見ると、乗客の数が少し多い許で、車内の設備も裝飾も一向一等と變らず、堂々たる紳士も淑女も平氣で乗

### 三等客車

ト  
\*  
おなを



三等客車

つて居たので、其以來、汽車は必ず三等と定めたのである。聞けば、獨逸などで、一等客車は『亞米利加の阿呆』の爲に作つたものだと言つて居る位。亞米利加の成金黨が、金さへ高く出せば宜いことのやうに思つて、譯もなく一等客車に乗りたがるのを笑つたものださうな。三等客車と言つた所が、尻引捲つて毛脛をむき出す不作法者もなければ、人の迷惑も構はず、我面白げに高聲で笑ひ騒ぐ者もない。車の出入に、押し合はず込み合はず。偶過つて人の足か腕に觸れば、振り向いて、「御免なさい」と詫びる。窓を開くにも、戸を閉づるにも、同室の客に氣を兼ねて、先づ一寸断つた上でなければ開けも閉ぢもしない。新しく入り來つた客は、大抵帽子を取るか、手を舉げて先客に獻する。出る時も、多くは「左様なら」位を言つて行く。人が入つて來ても、寐をべり返つて起きやうとせせず、人が立つて居ても、自分の荷物を腰掛から下さうとせぬやうなお客様は、藥にしたくてもない。

三等客車

愈ハンチンドンに着く一つ手前の停車場で、車掌が切符を集めに來る。英吉利の汽車では、孰れも着驛の手前で切符を集めるが、若し切符を渡した儘、更に次の驛を乗り過した時は何なるのだらうか、僕には頓と合點が行かない。合點が行かぬといへば、一般に改札口のない英國のプラットホームでは、切符へ鉄を入れるに、車掌が車の中にやつて來て鉄を入れる。無切符で乗つて、車掌が改札に來た時だけ、そつと車を出たら何するだらうか、之も分らぬ。次に今一つ分らぬのは、小荷物を預けた時だ。預けた儘で、チエックも何も呉れぬ。能くあれで先方に着いた時、無暗に人の荷物を持つて逃げる者がなかつたものだ、僕は不審に堪へぬ。斯なことは英吉利にして初めて行はるべきことで、逆も外では眞似が出来まい。

僕は上野の動物園の外面を通る毎に、何時も感じた、一體動物園の、中が動物園であるか、外が動物園であるかと。成程、園内には數百の動物が、檻の中や網の中に養はれ

て居るから、之を俗に動物園とはいふのだらうが、外に居る我々人間が、果して餘り動物扱ひを受けて居らぬだらうか、甚だ疑はしい。一寸土堤の上に登つても、こら／＼を食ふ。少し芝生に足を踏み入れても、警視廳の立札に追ひ返される。停車場に行つて汽車に乗らうとすると、先づ切符を買つて後、嚴重な柵を結んだ入口で一々改札を受けて、而して後、初めて車の中に乗ることが許される。出る時はといふと、之も同じく牧場に放つた牛を一つ一つ小屋へ追ひ込む様な體裁で、小さな出口から一々切符を調べた上で出すのだ。斯様にしてさへ、尙乗逃げ乗越しが絶えないといふに至つては、人間も亦随分人間らしくないと言はざるを得ぬ。

僕は英吉利に来て、初めてやゝ人間らしい取扱を受けたのである。(六月十五日)

「トリビューン」の編輯局

「睡たいかい」と、編輯主任のロートン君が突然問ひかける。居列ぶ編輯の人々、皆僕の顔を見てにたりと笑ふ。「睡たくはないが」と、僕は少し言ひ滯つて、「腹が空つて来て堪まらない。」と言ふ。一同は又僕の方を振り向いて笑ふ。「今少し我慢し玉へ、大組が濟んでから、俱樂部に行つて、ウキスキーでも飲まうぢやないか」と、副主任のヘビアツト君が曰ふ。

時は、今午前零時半を過ぎたばかり。僕は日暮から、此の「トリビューン」に来て、編輯の模様を覗いて居るのである。ロートン君と云ふのは、前年日本に来て居た「テレグラフ」の特派員ロートン君の兄で、極めて穩かな優しい人だ。僕は此の人と副主任との間に陣取つて、二人が忙しげに青鉛筆を動かす様を見て居る。副主任は年配の人でむしやむしやと顔一面鬚だらけ、之が原稿を書く時は、左の手にペンを取つて、下から上へ書き上げるのだ。夫で居て、人一倍早いので、誠に社中の珍品ですと、ロートン君が

笑つた。

丁度九時頃から、三四時間、編輯局は左ながらの戦場。電報が着く。卓上電話がかゝる。探訪から上つた材料が續々到来する。何處も變らぬ通信社の容積ばかり大きい通信が山の様に積もる。之を一々選り分け、書き直す。工場からは、井分間毎に空白の面積を報告して来る。給仕の子供が、殆ど間断なく原稿を工場に運ぶ。腹立しげにクランクマンとパイプを叩きつける音、コツ／＼と廊下を歩く靴の音。其の絶間／＼に、ギーン／＼と紙に走らす窓の音の音が聞える。其處へ又押覆さるやうに、ブーン／＼と高く低くエレベートルの上下する響が交つて来る。

「トリビューン」の誇るに足るべき點は、社を擧げて、丸で一家族の様な所に在ると、ロートン君は言つた。實にも編輯部員の打解けて睦しげな所は、除所目にも羨ましい。主任の一事を下僚に命ずる、一々丁寧に頼み聞こえる。下僚の主任と語るに、丁度兄弟

同士一家の内事を相談し合つて、も居るやうな。部員の更迭などは先づ滅多にないさうな。

夜間主任のアックランド君は、快活な若い人で、僕を社内残る隈なく案内して呉れた。上、僕の爲に自ら社の見取圖送引いて呉れた。工場に行くと、印刷部の外は、活版部、造部などに居る何百人といふ職工中、一人として白いカラーを着けて居ない者が無いのに、僕は一方ならず驚かされた。又階下の娛樂室に案内せられたが、此處には、書籍樂器車子、ペン、インキの類を備へて、何人でも勝手に入つて、勝手に備附品を使用して差支ないことに成つて居る。之は倫敦中で此の社にある許ださうだ。何人でも勝手に入れるとあつては、如何はしい身扮の者が來はせぬかと問うたらば、主筆氏打笑つて、室内の裝飾さへ立派にしておけば、決してそんな者は來ないと言つた。流石に英吉利人の其の分を解し序を正うして亂れざる趣は此の邊にも見える。冷飯草履に尻引捲つて、汽

記者俱樂部  
一〇〇  
車の二等室にのさばり込み、「金さへ出せばお客」主義の連中とは大分違ふ。  
今正に午前一時、愈大組の校正も何もかも済んで、鉛版が盡く地下の印刷工場に下りて仕舞つた。愈ウキスキーだと副主任が言ふ。(五月三十日)

記者俱樂部

ロートン君と副主任とに伴はれて、「トリビューン」社を出ると、昨夜からの小雨が、まだしとくと降つて居る。とある細い小路を曲つて、記者俱樂部に入れば、パーの前に「テレグラフ」や「メール」の連中が、群と詰めかけて、快げに笑ひさめきながら、頻にウキスキーを煽つて居る。見れば「トリビューン」の記者で、お先へ失敬して来て居るのも大分ある。孰もやつと編輯を卒へて、一盞の酒に一息ついて居る所。外面には、早や馬車の音荷車の響が受々と聞え初めて、世界は今や寂定の境より起き上らうと

いふ所。明け易き倫敦の夏の夜は、いつしか東から白みかゝる。

僕は、ロートン君から一同に紹介される。異境の同業者と聞いて、一同は愛想よく迎へて呉れる。中にも「テレグラフ」の某君は、日本に居たことがあるとかで、日本語で色々話しかける。其の内に酒が出る。煙草が出る。追々と様々の質問が出る。日本語で名を書いて呉れとの注文が、彼處此處から出る。戯れに僕が例の名筆を揮つてやると、斯な字を使つて、日本にどんなライノタイプが出来て居るかとの問が出た。今日に限らず、日本にライノタイプがあるかとの質問は、今迄に幾度受けたか知れぬ。其の度毎に僕は、忌々しいが、日本にライノタイプ所かタイプライターもないと答へたが、今夜は次手のことに、日本の活版工場には假名と漢字とを加へて、何千といふ異様の文字が日々使用されるので、之を偏と畫とで分類して、幾十幾百のケースの列が出来て居る。其のケースの列の間を、文選職工が端から端まで往來して、一字一字拾つて歩くのだと、

言つて聞かせたら、一同は眼を圓うして驚いた。さうすると、日本の職工は餘程の學者でなくちやなるまいと、誰やらが尋ねたので、僕はすまじ返つて、「記者も亦其の通り」と答へて呉れた。

僕は、此の種の記者俱樂部が、日本にも出来て欲しい。東京に記者俱樂部といふのはあるが、いづれの新聞社からも程遠い衆議院の一隅に、お粗末極まる會館を持つて居るばかりで、外國のお客は恐か、日本人だつても氣の利いたお客は連れて行けぬ位である。食堂があるでなし、娯樂の器具とても闘球盤位。其の上開館は晝間に限つて、夜はカツレツ一つ食へもしない。僕等は、三版の編輯を了つて、夜の一時か二時過になると、蕎麥一つ食ふことも出来ぬやうな今日の銀座の近邊に、如何に夜深でも麥酒位は傾けられて、わが同業者と語り合ふことの出来るやうな、一種の記者俱樂部が出来て欲しいと思つた。

兎角の話に段々遅くなつて、僕がロートン君と此處を出て其の家へ向つたのは、彼此二時半であつた。蕭々たる細雨を冒して、明け果てぬ町々の間に、馬車を驅れば、曉氣爽涼、さしも晝間は烟塵濛々たる倫敦の市中も、左ながら——左ながら何とかの如しといふ所だが、一寸氣の利いた句が思ひ浮はぬ。工場から原稿の催促が嚴しいから、之で御免を蒙つて後は明日になつて考へる！

### 午前三時の朝飯

「左ながら」の拾遺詞で舞臺回はると、今度はロートン住家の段。正面の下端には、一面の書架があつて、其の上に何だか二つ三つ油絵がかゝつてある。座敷の中央には、小さな丸卓子に、小羊の肉の焼いたのを大皿に盛つて、傍に皿小鉢が四ツ五ツあつて、今しも注いだ麥酒の盃二つに泡が沸々と立つて居る。ロートン君と僕と向ひ合せに腰をか

けて、先づ件のラムを平らげにかゝる。ミントソープの香がきゆうと空腹に答へる。ロ君が盃を舉げる。僕も舉げる。「ユア、ヘルス」と言ひ交はす。弟のロ君は、大病で病院に居るし、女中はまだ起きて来ない。我等二人の外は、猫の子一疋見えぬので、其の淋しいことと言つたらない。

思へば、一月前僕が初めて此處へ来た時は、弟のロ君がいそぐと出迎へて、兩手で堅く僕の手を握つて、能く来た〜を幾度か繰り返した揚句、何故停車場へ着く時間を前以て報せなかつたか、何でホテルなどへ行かずに直ぐ此處へ来なかつたかと、且つ怨じ且つ喜んで呉れて、夫から其の兄なるロ君に僕を紹介する、東京で知合になつたカレン大佐を電報で招く、其の上來合せて居たボーキス嬢といふのを無理に引き止めて、其の夜は打くつういで、質素ではあるが極めて愉快な晩餐會を此處で開いて呉れたことがある。其の後三四日経つて来て見ると、弟のロ君は盲腸炎で入院したといふ。其の以來

今に宅には居ない。僕は一應能く分つた積で、自分も使ひ、人にも教へた英語の「ホスピタリティー」の眞の意味を、此處此のロートン君の家で、初めて誠に解し得たのである。ロ君は麥酒を傾けながら、頻に弟の事を言ふ。時々「弟が居たらはネー」と、左も心細げに言ふので、僕は氣の毒で堪らなかつた。世に此の人ほどの弟思ひも珍らしい。弟の方でも、東京に居る中から、能く兄のことを噂して居たが、倫敦では兄弟水入らずの二人暮し、何方かといふときやツキやと能く騒ぐ方の弟と、眞面目な落ちついた兄とが、何うして斯んなに相和し得るものかと、不思議に思はれる位だ。僕が時々病院へ見舞に行くと、何時でも、兄の方に逢はぬとがない。「一體君の兄貴は毎日見舞に来るのか」と聞くと、如何にも毎日やつて来る所か、来る毎に花束を持つて来たり、菓子を呉れたり、書物を届けて呉れるとのことであつた。

午前三時、倫敦の夜は全く明け放れた。強て辭して歸らうとすると、ロ君は態々ピカ

午前三時の朝飯

一〇六

デリーの角迄送つて来て、馬車を雇つて呉れた。疲れて居る折柄、そんなことをさせては相済みぬと、僕は途中で幾度か辭したが、ロ君は一向平氣で、今度英吉利の新聞記者が日本へ行つた時は、何分宜しく頼むとのことであつた。

夫で思ひ出したが、或時僕はさる音楽會へ招かれて、オックスフォード街の近邊へ乗合馬車で出かけたことがある。所が僕の隣に居た品の好い老人が、僕の土地不案内らしいのを見て、何かと世話を焼いて呉れた上、愈自分が馬車を下りやうとする時、僕の行先を車掌に告げて、こま／＼と間違ひの起らぬやうにと頼んで呉れたので、僕は厚く禮を述べた。すると其の老人は莞爾とほ／＼笑みながら、「いや私に御禮は要らぬから、今度日本で英吉利人が道に迷つて居たら、相應な面倒を見てやつて下さい」と言つた。僕は之を聞くといとしく、何とはなしにはら／＼と涙を落した。其の以來、僕は英吉利人の言語不通で困つて居る者を見たらば、決して知らぬ顔で済ますまいと、固く決心して居る。

此の老人の事を、歸つて祖母様に話したら祖母様さも不審さうに、「夫でも耶蘇かい」と仰せられた。僕の祖母様は大の法華癡りである。

### 「メール」の社長室

「朝日」の露都通信員の紹介で、「デリー、メール」の外報部長ワットニー君を尋ねると、生憎旅行中とのことで、主筆のマロー君が其の代りに會つて呉れた。折節社長のノースクリップ男爵も来て居るから會つて見ぬかとの話に、早速マ君に伴はれて、社長室に出かけた。社長といふのは、小作りなく／＼と太つた愛嬌のいゝ人で、僕の顔を見るが早いか、掛けて居た椅子から飛んで来て、堅く僕の手を握つて、先づ初對面の挨拶をした。同じ初對面の挨拶でも、一間ばかり離れて、恭しく首を下げて、「初めまして」と來るのとは違つて、力を強めて「デリーライテット」云々と來るのは、何處かに暖味

メールの社長室

一〇七

倫 敦 小 品

がある。

ノースクリップ卿は、新聞の経営ばかりで今日迄に仕上げた人で、元は「アンサーズ」といふ圓珍一流の小雑誌を出して、僅に生計の資に供して居た位の人だが、其が段々に成功して、とうとう今日では賣高に於て倫敦第一の「メール」を發行することとなり、夫が大に當つて、當年のホームスウチアス君が勳爵士に叙せられて、サー何がしといふやうになり、間もなく又男爵に進んで、今ではロード、ノースクリップといふやうになつたのである。新聞雑誌の事業が大好きで、「メール」が倫敦と巴里とマンチエスターとで發行せられて居る外に、日刊週刊月刊の新聞雑誌合せて五十三種を経営して居るといふ。中には「デーリー、ミロア」と云ふ日刊の書報もあれば、盲人用「メール」として全文印字機で印刷したものもある。刊行物の種類が多い爲、一社の中に一切を纏めることが出来なくなつて、「メール」の本社の外に、夫々に飛び離れた工場や、編輯局が幾何あるか知れぬ。

大 英 游 記

新聞記者と聞くと他人のやうな気がせぬとて、卿は滔々と辯じ立て、中々僕を返さうとはせぬ。彼一句我一句の話の末に、此の前佛蘭西人の倫敦觀といふのが新聞に出て、非常の喝采を博したが、日本人のは未だ曾て見たことも聞いたこともないから、是非一つ書いて見て呉れまいかとの相談となつた。打明けて白状すると、僕は毛頭そんな小面倒なことを書く氣はない。先づ、伏見宮殿下の御滞英中は逆も六ヶしいと断ると、宮殿下の御滞英中だから殊に面白く讀まれるのだといふ。併し、其の間は逆もそんな時間がないと言ふと、如何に忙しくても、一日に三十分や一時間都合のつかぬことはないといふ。僕は日本文なら兎に角、英文では、逆もさう手ツ取り早く書けぬと、意氣地のないことをいふ。中々承知して呉れぬ。書けなければ此方で書くから、事實だけ話して呉ればよいといふ。愈むづかしくなつて來た。僕は参考書も何もない旅の空で、何が書けるものかといふ。参考書を調べた上で考へたやうなものは、此方でも要らぬ、唯初めて、倫



メールの社長室

一一〇

敦へ来て見た常座の感想を、有の儘に書けばよいのだといふ。僕は、憚りながら倫敦に  
来でからまだ十日にしかならぬ。停車場からホテルに着いて、ホテルから日本の大使館  
に行つたきりで、まだ何一つ見たものはない。感想などのあらう道理がないぢやないか  
と答へる。受太刀も受太刀、殆どしどろもどろだ。男爵は賺さず、「見ないといふなら、  
之から何でもお見せ申さう」と遮二無二突込んで来る。實の所、僕は全く泣き出したく  
なつた。

此に於て、前に従軍記者として滿洲に来て居たマッケンジー君が呼び出された。マ君  
は「メール」の特務記者といふので、平生は別に定まつた用のない代りに、何時何な命を  
受けても差支のないことになつて居る。今晚の船で南亞弗利加へ行けと言はれても、ち  
やんと用意が出来て居る位ださうな。男爵は此の人を僕の案内につけて、僕に倫敦を見  
せやうといふのである。やれ／＼飛でもない人を呼んで来たものだ。

僕も、とう／＼退引ならず、引受けて仕舞つた。(六月一日)

### 汽車中の原稿

今一度打明けて申すが、往生際の悪い僕は、此の期に及んでも、まだ確と書く氣はな  
かつた。夫れ、倫敦の見物に少くも四五日はかゝる。其の間に、忙しいとか何とか唱へ  
て、のんびんくらしと引延ばして置けば、何時しか先方でも催促にあぐんで、其の儘泣  
寝入となるに相違ない、など、宜しく高を括つて居つた。實の所、日本では、此の傳  
で屢奇功を奏したこともある。所で流石に「メール」は「メール」だけあつて、却々そん  
な手は食はぬ。

マッケンジー君と共に、社長室を出て、昇降機に入ると、今日からは君の接待役だか  
ら、先づ倫敦で何々が見たいか、何んなことがして見たいか、遠慮なく言つて呉れと、

汽車中の原稿

一一一

マ君がいふ。昇降機の下りて仕舞はぬ中に、早や此だ。其處で、僕は先づさし當り、議會を觀て、學校を觀て、裁判所を觀て、教會堂を觀て、倫敦第一のホテルと倫敦第一のクラブで御飯を喰べて、倫敦第一の芝居に行つて、倫敦第一の寄席に行つて、自動車を飛ばして何處か田舎に行つて半日ほど遊んで、而して出来るなら近頃倫敦で禁止になつた樂劇「ミカド」を何處かへ見に行きたいといふ。マ君は打笑つて、快く一を承知して呉れた上、社の寫眞部で、僕の寫眞を取らせて、其の日は分れた。

翌日は、約束通りマ君を尋ねると、ちやんと馬車の用意があつて、今日は午前中に輕罪裁判所を觀て、サボイ、ホテルで晝飯を喰べて、午後は重罪裁判所を觀て、夫から三時何分とかに、セントパンクラス停車場から汽車に乗つて、シエフキールドに下るのだといふ。所謂裁判所と晝飯とは分つて居るが、汽車に乗るとは何するのかと問ひ返すと、君のお望みの「ミカド」が、今晚シエフキールドでお名残り演奏をやるので、昨晚

電報を打つてボックス一つ取つて置いたとの事だ。夫にしても、夜の八時に初まるものを、三時の汽車で行くとは、いくら早いのが商賣でも餘りぢやないかといふ。僕はシエフキールドを倫敦の町外れにでもあることとばかり心得て居たのだ。所が其の實シエフキールドはマンチエスターのつい傍で、此處から百五十八哩とかあつて、三時五十分の汽車で行つてもヤツと八時十分前に着く位、今晚は無論彼方で泊る筈で、ホテルの方もちやんと電報で部屋を明けさせてあると、マ君が笑ひながらいふ。如何な僕も之を聞いて我を折つた。名も知れぬ僕等の原稿を求むる爲に、之ほどの用意迄して呉れたかと思ふと、僕は嬉しいやら耻かしいやら、何とも言へぬ一種の感に迫つて、此處に初めて何か書かうといふ決心がついた。尤も書くにした所が、見物に四五日を費した上、のんびんぐらりとやる積であつたことは、勿論である。

斯くて其の日は豫定通に、裁判所を觀て、御馳走になつて、シエフキールドに下つて、

黙に使いて

芝居を見て、ホテルに泊つた。翌朝は二番の汽車で倫敦に向つたが、其の車の中で、マ君は今から倫敦迄三時間もかゝるから、此處で原稿を書いては何かと言ひ出した。僕はぎよつとした。先づペンがないといふ、鉛筆でよいといふ。紙がないといふ、やらうといふ。字引が入用だといへば、分らぬ字は相談に乗らうといふ。何と言つても逃げさせぬ。仕方がないから、とう／＼一枚書き二枚書いた。書く毎に、マ君は読んで見て、今少し／＼と側から催促するので、愈倫敦へ着く迄に、第一回は全く出来上つて仕舞つた。

成程、之位に金をかけて、根氣よくつき纏つて催れば、どんな原稿も手に入る筈だ、と、僕はほと／＼感心した。

## ライシナム座

汽車をシエフフィールドに下るや否や、ホテルに革囊を投げ込んで置いて、其の儘馬車をライシナム座に飛ばせた。恐らく、今日は「ミカド」の見納めといふので、近郷から態々見物に出かけた者も大分あつて、場内は早く満員となつて居る。僕はマッケンジー君と、豫て注文して置いたボックスに入ると、演藝は今其の第一幕を初めたところ、花やかな友禪縮緬のキモノを着けた美しい娘が、三十人ばかり今しも舞臺の真中で扇子をかざしながら、「アワー、グレート、ミカド」の節の合唱をやつて居る。本場の黄色いのが、態々百五十哩だか六十哩だかの先から見に来て居るとは、よもや知るまい。

一幕が済むと、棧敷一面はツと電燈がつく。日本人が居るとして、皆々目を僕の方に注ぐ。上下を舉げて、寄ると觸ると、「ミカド」興行禁止の噂ならざるはない今日、僕が目されるのも無理のない話で、翌日のシエフフィールドの新聞には、僕を宮内省のお役人と間違へて、何でも興行禁止問題取調の爲に来た者のやうに傳へたのがあつた。幕間が

十五分あるので、茶でも喫みに行かうかと相談して居る折柄、座方の方で、一度取締役の部屋迄来て呉れぬかと言つて来た。マ君と一所に行つて見ると、何處の劇場も裏に回れば汚いもので、事務室の中には、紙片やら明瓶やら一杯に引散して、卓子や椅子が幾つか横筋違に立ち列んである。其の中で先づ興行権主のサボイ座の取締役ベラミー君といふ、太つた快活な老人が出迎へる。引續いてライシアン座の若い取締役も出て来る。マ君が例に依つて『有名なる』を頭につけて僕を紹介する。遠來の珍客に茶菓でも差上げたいからとのこと、茶が出る、炭酸水が出る、ウキスキーが出る。ベラミー老人、盃を舉げて又しても唱ふる「日英同盟」の萬歳。さて、世の中に「日英同盟」ほど下戸の閉口するものがあらうかい。

後二幕で「ミカド」が無事に演了されて、いざ歸らうとする、老人又呼びに来た。今度は最後の祝盃を舉げやうといふので、列み居る一同の盃に酒をなみくと一杯注がせ、

一杯つがなければなか／＼飲まうとは言はず、飲んで仕舞へば、又注ぎ又注ぎして、今度は天皇陛下、今度は伏見宮殿下、今度はエドワード第七世といふ風に、止度もなく祝杯を舉げる。其の中段々酔が回つて、何の話から初まつたか、老人望遠鏡のことから、星の距離を算定する公式とかの講釋をやり出して、滔々と大氣焰を吐き出した。何でも、此の老人は、昔し海軍大學校の天文学教授であつたのを已めて、劇場取締になつたのださうだ。何百年目に何といふ星が出て来るなどいふ迂遠いことを研究するよりは、幾日の間にも何人お客が来るかといふ勘定の方が餘程面白いと、老人は慨然として笑つた。僕がうツかり口を滑らして、女優の三味のひき方が、飯でも盛るやうな手つきで、如何にも可笑しいといふと、老人、何うひくののだと言ふ。僕も「日英同盟」の大分利いて居る折柄とて、口先では説明が出来ぬから、三味を持つて来いといふ。「日英同盟」許りか「エドワード第七世」迄が大分利いて居る老人、三味線と一所に、ヤム／＼に扮した女

優遊呼んで来た。僕も今更後へは引かれず、左も心得たやうな顔をして、竿の持ち様から扱の取り方迄説明して聞かせた。愚圖々々して居ると、次手に何か一つやれとでも言ひさうなので、僕は「君と共に、早々此處を逃げ出した。」

劇場の出口は、孰も皆既に鎖されて居るので、やつと事務所脇の非常口を明けて貰つて外に出る。夕方からの雨は尙小歇なく降つて、いつしか風さへひゆうくと吹き荒んで居る。

### 無名の投書

話頭が下につて甚だ相濟まぬが、此の前萬國花柳病會議の開かれた時、各國の委員は孰も花柳病豫防の策として檢微強行の法を採るを最上とすることに一致したが、獨り英國の委員ばかりは、何しても此の説に賛成しなかつた。段々其の理窟を聞いて見ると

英國では、賣笑婦自身に微毒の怖るべきことを知つて居て、他の注意を待つ迄もなく夫々自ら之が豫防の手段を取るの、なまじひ之を法律の力で強行しやうなどとすると、却つて之に依頼して注意を忘れる虞が起るとのことであつたさうな。英吉利人が賣笑婦人の末に至るまで、自治の精神に富んで居ることは、此の一事でも知れる。

凡そ不文法の精神は、英國の到る處に存して居る。命せずして行はれ、令せずして従はるゝは、英國獨得の長所で、法律はなくとも、勅令は出さずとも、萬事萬端きちんと定めり切つて、一絲亂るゝ所がない。尤も中には理窟も何もなくして、唯だ多年の習慣で定つたものも大分あつて、慣れぬ間は随分小面倒なことが多い。僕は日本を出る時、黒色の革囊を買つて行つたが、英國で黒色の革囊を使ふのは婦人ばかりで、男子は必ず茶色を用ひる。或朝雨が降つたが、街道を見ると一向傘を持つた人が見えぬので、革囊の裏に懲りた僕は、雨が降つても傘をささぬが英國の習慣かと、飛でもない給を吹いて笑

はれたこともある。朝は何を食ふか定つて居る。夕には何を着るか定つて居る。段階子で人に行き會へば、何方へ避けるか、自轉車に乗つて道を曲る時は、何方の手を擧げるか、皆ちやんと定つて居る。定るべき道理のあつて定つたのはよいが、左もなくして無暗に定つたのは、様子を知らぬ外人を惑はしむること夥しい。

僕が「メール」に書いた第一回の感想は、先づ此の「習俗の壓制」に一撃を加へたのであつた。所が「メール」で仰々しい小引を之に加へたのと、日本字やら僕の寫眞やらを入れたのが人目を惹いたものと見えて、之が案外の評判となつた。之に氣を得て、僕は二回三回と引續いて原稿を送つたが、其の間もマ君は自動車で迎へに来て、ノースクリック卿の本邸へ連れて行つたり、ピズ、マゼスチー座の沙翁劇を見せた後、トロカデロ樓で三鞭を飲ませたり、僕が初めに注文した通りのことを順々に行つて呉れた。朝の内は原稿や通信を書く。午後は、校正のゲラ刷と共に、マ君の案内が来る。『今夕は國民自由

俱樂部で晚餐を喫し、アルハムプラの寄席に行くこと。服装はスモークキング、ジャケツト、襟飾は黒の蝶形。』などと書いてある。僕の投書中に、英吉利の服装の小むづかしいのを笑つたので、先生冗談に態々服装迄書き入れて來るのである。

兎角して、とうとう約束通り七篇の投書は結了した。此の間に讀者から僕に宛て、批評を送り越した者は幾人だか知れない。中にもメリー、ジョーンズといふ夫人が、小形の罫紙十三枚に細かく一杯に書きつめて、僕の婦人論を堂々と攻撃して來たのは、僕も少々驚いた。其の外褒めたものもある。貶したのもある。僕の投書に何等の關係もない様々のことを言つて來たものも有つた。中には、僕の觀察に對する批評は申す迄もなく、洋服屋の注文取りがある、切抜通信の申込がある、音楽會、展覽會の案内がある、書物を呉れる人がある、書物を書いて呉れといふのがあ、雑誌の原稿を頼みに來るのがあ、繪端書の御注文がある、病院を見に來いと案内がある、日本に隠居したいが生活

費が何なものかとの聞き合せがある、講筵を申し込んでくるのがある、日本の友人の安否をきくに来る、日本の下女の世話を頼みに来る、プリストル迄遊びに来ぬかとの問い合せがある、パーミンガムへ来たら寄れといふのがある。「メール」は賣高の多い新聞として、僕の投書は餘程廣く讀まれたものと見えて、到るところ「メール」で承知した由話しかけられる。僕は大に面目を施した。中にも難有いと思つたのは、レミントンといふ所から、二三日泊りがけに來いとの手紙を引續いて四度も受けたのと、倫敦蓄音機及印字機會社から、立派な大聲蓄音機を一臺送つて呉れたのとである。新聞の讀者が、之ほど熱心に讀んで之ほど熱心に批評してくるのは感心の至りながら、取分けて、流石に英國と感じたのは、此等の數多い書面中、如何に手厳しい攻撃を寄せた者でも、一として匿名のものはなく、盡く宿所姓名を明に書き入れてある一事であつた。日本なら、新聞の記事を見て、批評を寄せるなどいふことは、好事の骨頂と認められて、偶之を寄

せても、十中の九分九厘は匿名である。現に倫敦でも、僕は或日本人からの批評を頂戴したが、之ばかりは匿名で、而かも「八人の同胞を代表して」などと、多數を頼んで出られてあつたので、何處迄も國粹を保存せらるゝ哩と、僕は可笑しかつた。僕は日本の新聞にも、歐羅巴風の讀者を得たいものと、切に希望して居る。

### 日本人俱樂部

倫敦に日本人會と稱ふる俱樂部がある。誰も、ないとは言はぬ。言つた所が、矢張りある。有る者は有りとは、論理の定則である。有句無句は藤の樹に倚るが如し。忽然として樹倒れ、——いや、そんなことを言ふ積でない。

兎に角、ある。地下鐵道のレスター・スクエア停車場で下りて、或は上つて、其の邊でキング街の卅九番地と巡查に聞けば、「ハ、ア御國の俱樂部ですな」と言つて、教へ

日本人俱樂部

て呉れる。細い入口から、二階に通れば、食堂と讀書室とがある。三階には、應接の間と手水場がある。四階に上れば、此に玉突場がある。丁度鰻が岩と岩との間に頭を突込んだ様に、二階三階がうねうねと人の家の間を潜り抜けた様な家だ。が先伯林のクラブよりは、大分小奇麗に出来て居る。荒川眞澄君といふ恐しい玉突の上手な辯護士が取締をやつて、英吉利の書記が獨り居て、給仕や厨夫は大抵日本人を使つてゐる。鰻の蒲焼、比良目の刺身、海老のテンブラ、菜の浸し物、大根の鹽漬、其の外一寸した日本料理は何でも出来るので、此の前も「タイムス」のスコット君夫婦を招いて、午餐を饗したら、非常に旨いと言つて、一つも残さず平らげた。二人ながら一つも残さなかつたところから見ると、まんざらお世辭でもなかつたらしい。日英同盟でやかましい折柄とて、倫敦の真中の日本料理は存外にもてるのである。

日本の飯が食へ、日本の新聞が讀めるといふので、夕方からそろそろ會員がやつて來

日本人俱樂部

る。會員許りか、倫敦に來た日本人は、必ず一度寄つて見る。僕の居た頃は、特使宮の一行を初とし、遣米艦隊赤十字社興業銀行の連中などで大分賑つた。西大將は、松石宇高の兩將校を随へて、殆んど毎晩出て來られる。赤十字大會に來られた有賀博士が見える。日本の教育制度の講義に來られた菊池男爵が見える。陸奥大使館書記官が來る。坂田總領事が來る。村田興銀總裁秘書が來る。名優左團次が來る。大の劇通松居松葉先生が來る。殊に此の頃は不思議に新聞記者の多い折で、右の松居君を初め「時事」の小山君、「大毎」の高石君、「二六」の小野瀬君、「法律新聞」の高木君、之に「中央」に關係ある前の荒川君と、「日本」に關係ある某君と僕とを加へて總勢八人落合つたことさへある。其折誰やらが、うかと口を滑らして、新聞屋が何とかと言つたとかで、一同から八方攻撃を受けたこともある。次手だから断つておくが、世間では能く新聞記者と新聞屋とを一つにして、動もすると、人に新聞屋呼ばりをする者がある。關西に行くと、殊に多い。夫



れ相笨なる頭は、動もすれば差別を忘れるものである。悪意で言ふではあるまいが、聞く者には癢に觸る。以後吃度心得て貰ひたい。

或夜、西大將が愈明日を以て、巴里へ出發と定まつた時、居合せた一同は、三鞭の杯を舉げて、坂田總領事の發聲で、大將の萬歳を祝した。其の上大阪の某君が、すつくと立つて、朗々と大津繪節を歌つたので、大將も倫敦の兵中で、大津繪を聞かうとは思はなかつたと笑はれた。

異境に故國の面影を寫して、此に貴賤を亡し、貧富を忘れて相語るの樂みは、斯の如き俱樂部に限る。日本人の足跡、天下に遍うして、世界到る處に、斯いふものが出る

と、餘程面白いに相違ない。

## 晚餐とシガー

今日は、スタインバーグ老人から、晚餐の案内とある。先づそろりと参らう。

此の前、日本協會の年次大會で、僕の隣へ白髮の老人が一人坐つた。隣づからのこととして、色々話して見ると、此の人名をスタインバーグと言つて、何でも四五年前半ばかり、日本に遊びに来て居たことがあるとかで、矢張り大の日本好だ。見せたい物もある、聞きたい事もあるから、何れ其の内宅に案内しやうとのことであつた。僕は例に依つて「日英同盟」の祝杯がちと利き過ぎて、夫切り老人のことを忘れて仕舞つて居たが、或日「自宅の者ばかりで晚餐を差上げたから、略服で来て呉れ」との案内が来た。青い紙に青い状袋、夫に手跡が何しても女とよりは見られぬ。合宿の人々に聞いて見ても、多分女だらうといふので、僕は一も二もなく、之を前日音樂會の招状を呉れた何がし夫人と早合點して、早速返事を出した。出した返事は、差支あつて断るといふのであつたから宜かつたものゝ、左もなければ、飛んでもない恥を掻く所であつた。其の後又案内

が来た。今度も矢張り晚餐に來いとはあるが、外のお客もあるから、日本協會の時の服装で来て呉れとある。僕は之で初めて気がついて、帳面を調べて見ると、成程麗々として、タイムバッグといふ名があつた。失敗つたとは思つても、今更取返しがつかぬ。日本なら、穴へでも入りたいといふ所を、倫敦だけに穴は地下鐵道で御免を蒙つて、愈今夜出掛けることゝなつたのである。何とか言つたら、日本では奥様に返事を出すのが禮だとやる積だ。

倫敦の北の北の端のスウキス、カテゴリー停車場を出て、並木道美しい通に馬車を走らすこと五分にして、早や其の家に着いた。案内せられて、客間に通ると、壁やらマントルピースやらに、日本の細工が大分列んで居る。お客は、僕を合せて男が三人、女が二人、主人側には、スタインバーグ老人に、其の姉と妹と合せて三人、姉は六十位、妹も五十近い。ス君も、此の年になつて獨身なら、姉も妹も獨身である。「日本の禮」に依つて

僕が返事を出した等の、當のスタインバーグ夫人なる者は、影も形もない。

一體、英吉利には女が多過ぎる。といつて別段喧嘩にもなる譯ではないが、實際の所、英吉利には女の数が男の三倍あるさうな。英吉利に美人の多いのも、之が爲ださうだが、之と同時に未婚の老女の多いのも之が爲だ。僕がス君を女と間違へたのも、畢竟するに亦之が爲である。全體老人の癖に、あんな女の様な字を書くのが悪いのだ。

お客が揃つて、愈食堂へ出かけるので、僕はス君の姉様の手を取つて行くことゝなつた。僕は遠來の客といふので、能く諸方の宴會で、主人側の夫人の手を取らせられたが、凡そ天下に、女の手を取つて食堂に連れて行くほど、僕に取つて閉口を極むることはない。沙翁の「メリー、ワイヴス、オブ、ウキンズル」の中の、シャローといふ男は、何時も細長い手の置場に困つたさうなが、女を右の腕に凭らせると、誠に手首の處置に困る。突ツ立てゝも變だし、ぐにやりと垂れても可笑しいし、左ればとて拳骨を固めて、

レデーの案内でもあるまい。誠に閉口を極める。  
 食堂に入る。数々の御馳走が、次から次へと出て来る。大分話に花がさく。幸にじて、ス君を女と間違へた話は、出ずに仕舞つて、漸くにして、食事は済んだ。斯う言つては相すまぬが、僕は英吉利で御馳走に招ばれる毎に、最後の皿が仕舞つて、シガーが出て来て、レデーが一同席を外すと、やれ／＼と思つた。後には男ばかり残る。シガーの煙寛かに棚びく中に、ベネデクチンか何かの盃を舉げる。丁度斯いふ時に、ス君は飯坂へ行つた時の話を初めた。曰く、「或朝未明に起きて、温泉に入つた所が、又一人誰か来た。僕はノ／＼と追ひ返す。頓て又一人来る。又ノ／＼で追ひ返す。所が又一人来た。今度は女だ——。」傍に居た一人の客が笑つて、「今度はイエス／＼だらう。」ス君も笑つて、「其の女は無邪氣に湯に入つた。女も笑ふ。僕も笑ふ。斯ういふ美しい習慣は、迎も英吉利にない。」一同は皆笑つた。老人だけに罪がない。

頓て再び女客と一所になつて、ブリッヂが初まる。夫が面白さについ夜を深して、歸らうとする頃には、もう汽車がない。ス君は老體を扶けて、態々戸口迄出て、啾々と呼子を吹いて、馬車を呼んで呉れた。倫敦では、一つ吹けばフサア、ホキローラー、二つ吹けばハンソムが来ると定つて居る。

「タイムス」の索引部

倫敦「タイムス」が、世界第一の信用ある、世界第一の新聞であることは、誰一人知らぬ者もあるまいが、其の「タイムス」の編輯局の一部に、世界第一の索引部のあることは、餘り世間に知られて居らぬ。

假に譯して、此に索引部といふのは、同社のインテリジェンス、デパートメントのことで、文字通に言へば、報告部と譯した方が宜いかも知れぬ。此の索引部の主任は、シヨ

ン、チャータース君として、同社で發行する「エンサイクロペディア、ブリタニカの編輯の  
 次手に、此の事業を思ひ立つて、創立以來まだ四五年にしかならぬ。チャ君の下に、助  
 手が八人ある。此等が、互に代り合つて、晝間から夜半にかけて、脇目もふらず、索引  
 の編纂にはまり込んで居る。

一體其の索引とは、何の索引だといふと、一には新聞の切抜、二には公刊の書物、三  
 には官報及青書で、此等を精讀して、一々之にアルファベット順の索引をつける  
 のである。成程、書物の索引ならば、既に大凡は夫々に附いても居るし、夫でなくても、  
 一應の順序を立て、書き列べたものであるから、索引を附けるにしても、手がりは  
 つき易い。何事が何度何箇所に出て来るかも豫め測り知られぬ數々の新聞切抜を、一々  
 分類し標識して、之に索引をつくるに至つては、聞いた許りでもうんざりする。

我邦では、書物の索引でさへ、餘り行はれて居ない。索引らしい索引といふのは、法

令全書に附いてある位のものである。随つて、索引の便利も餘り知られて居なければ、  
 之が編輯の困難も、亦無論知られて居らぬ。新聞切抜の索引など、聞いても、世間では  
 下手な書物の目録位に考へて居る方も多からうが、何うして、そんな生優しいものでな  
 い。先づ此に切抜があるとす。「タイムス」のもあれば外の新聞もある。之を其の記  
 事の題目に依つて、政治なら政治、外交なら外交の中へ入れる。之が「日本」に關したこ  
 となら、政治部の日本に入れる。日露戦争に關したことから、日本の日露戦争部に入れ  
 る。戦争前のことなら、前の部、後なら後の部に入れる。戦争前の中にも、戦争の原因  
 部がある、列國の態度部がある、日露談判部がある、戦争の準備部がある。其の外色々  
 ある。其の又同じ戦争の準備部の中にも、海軍がある、陸軍がある、軍事以外のものが  
 ある。海軍の中に、軍艦部がある、將校部がある、色々ある。斯様に、ちやんと部類が  
 備はつて、其の中に切抜を入れて行くだけなら、唯面倒といふだけですむが、初に此の

部類を定めるまでの苦心は、一通りの苦心でない。夫に、同一の記事が、彼の部にも此の部にも跨つて來ることがある。其の時は何れを見ても分るやうに、クロース、レフェレンスとして、彼此参照の用に供すべき別の索引を用意しなければならぬ。又どの部類にも入れ兼ねるのがある。此の時は新に部類を作らなければならぬ。又均しく切抜といった所が、「タイムス」の切抜の中などには、僅か二三行位の短い小さい奴が屢ある。夫でもちやんと分類する。其の中に、ラツかり人の名が二ヶ所にも出て居れば、記事は二三行でも、索引の方へは矢張二ヶ所に附けなければならぬ。

此の面倒を極めた索引部のある結果、世間に順はれたものとしては、「タイムス」の月次及年次大索引目録がある。之は、日々の頁數十五六頁を下らぬ「タイムス」の紙上に出た一箇月又は一年中の記事を、一々アルフレット順に配列した總目録である。之さへ見れば、何の記事が何月幾日に出て居たか一目に知れる。週刊雜誌の索引目録なら、日

本でも「ジャパン、メール」や何かでやつて居るが、日刊新聞に至つては、索引は思か、單純な目録だけでも、之を發行するものは、世界中に唯我が倫敦「タイムス」一つだけである。僕は此の大苦心の結果に成つた年次索引がどれだけ賣れるかと聞いて見たら、チャ―タークス君笑つて答へて曰く、夫はお話にもならぬ程の少數である。併し其の少數の購讀者は、孰も之を必要とする眞個の愛讀者ばかりである。社は初から大に賣れるとも思つて居なかつたし、又之で儲けやうとする念も毛頭ない。百年と経ち、二百年と経つ中には、追々知己が殖えて來るに相違ないと確信して居ると。知己を千歳に求むるチャ―タークス君の意氣は、實に壯とせざるを得ぬ。而して、チャ君の話によると、此の所謂知己の中に、既に巴里の我が日本大使館が眞最初から加はつて居るといふのは、やゝ人意を強うするに足るものがある。

外に順はれたのは之だが、内に在つては、此の索引部が、殆ど編輯部の中心となつて

「タイムス」の索引部

一三六

居る。八方から様々のことを聞きに来る。チャ君は助手を指揮して、一々之に答へる。丁度僕が索引編輯に關するチャ君の講義を聴いてる最中にも、外報主任のチロル君が、白髯を掀しながらやつて来て、マセドニアの何とかは、何時頃だつたかと聞く。金切聲の財政主任フーバー君が、四五年前にマンチエスターの何處とかでやつた、チェンバレンの演説が見たいと言つて来る。電報主任のスコット君が、兩肩を怒らせながら、今来た電報の中に斯ういふ地名があるが、何の邊だらうといふ。さうかと思ふと、内報部から何とか僧正の履歴を聞きに来る。主筆の秘書から、二月の幾日やらの社説が見たいと言つて来る、中々忙しい。チャ君、僕を顧みて、どんなに込入つた質問でも、五分間あれば必ず調べて見せますといふ。

「タイムス」の編輯局

「タイムス」の編輯局

一三七

地下鐵道のブラック、フライアース停車場を出ると、直ぐ其の前に、巍然たる「タイムス」社が立つて居る。正面は、廣告と新聞注文の受附口であるが、之は八時以後閉鎖して誰も居ない。一體歐羅巴や亞米利加では、どんな店でも、八時過になると皆仕事を仕舞ふ。日曜日の如きは、郵便迄が休んで仕舞ふか、配達を一二回に減する。夫から見ると、日本などは結構なものと、僕はいつも思つて居る。近來日本でも、之を真似やうとする阿呆があるさうな。休むことだけ西洋に真似たとて、何になる。社の左側の細い路次（と言つても日本の路次よりは大きい）を入つて、一寸とした空地を通り抜けて、突き當りに、工場の入口がある。此處で案内を求めると、編輯局の入口を開けて呉れる。其處を入れば、直ぐ昇降機があつて、三階の編輯局迄する／＼と釣り上る。全體此の昇降機なるものは、誠に怪しからぬもので、此の前も夜深に歸らうとして、折悪しく給仕が居ないので、一庶心得顔に其の中へ入つて見たが、先生一向動

かうとはせぬ。自國太踏んでも動かぬ。己むを得ず人を呼び立てたら、ボタンを押せといふ。命の如くボタンを押したら、下るべき等の上へ昇りやがる。忌々しなんども愚なりだ。所で、昇るだけなら我慢もなるが、どん／＼昇つて一向止らぬので、此奴天井裏迄突き貫けたら何うしやうかと気が氣でなかつた。幸にして、二階目かで止つたので、其處で人に問へば、ボタンの押し方があるとのことであつた。成程ボタンもスタンプ見たやうな者かと悟つて、其の以來僕は大的昇降機通となつた。

二階には、主筆室、主筆秘書室、及内報部編輯室などがある。三階には、取附の左側に、外報主任のチロル君の室があつて、此處にチ君が助手のブラウン君と一所に居る。お向ひが索引部の室で、夫から一軒おいて先が、外電主任のスコット君の室、夫から又一軒おいて隣に、財政主任のフーバー君の室がある。先づスコット君の室から素見して行かう。

ス君は、助手一人と、續々到來する幾百通の電報を選分けて、筆を入れる、書き直す、標題をつける、工場に送る、重要なものが来ると、主筆と外報主任とに報する。中々忙しい。巴里伯林邊からは、別室の自動電信機で取つた青い細い紙が来る。彼得堡維也納からは、普通の電報が續々舞ひ込む。見れば、路透電報が、左ながら、日本の何々通信社から来る通信と同じやうに、机の片隅に堆く積まれてある。よく／＼特電の少ない時は、大抵棄て、仕舞ふのだと、ス君がいふ。

此の室に限らず、「タイムス」では、受持々々で夫々部屋が別に成つて、一室凡そ十坪ばかり。之を大抵一人か二人で占領して居る。五六人も居るのは、僕の見た所で内報部ばかり。室毎に、夫々の参考用書が壁一面の書架に一杯ある。其の森として静かなこと、到底他社のさわ／＼したのと比べものにならぬ。

ス君の室を出て、索引部でチャーターズ君の講義をきく。外報部でブラウン君と外國

通信の話など聞く。財政主任の所で、油を賣る。時には自動電信機の室に行く。パリへ杉村君が来て居る。今何時か、天気はどうか。』など聞く。パリから返事が来る。今頃は、大方巴里のラビノ君などが、オペラ通りの群集を見下しながら、忙しがつて居る所だらう。

僕は、八時に晚餐をすませた後出かけて、十二時に社を出る。餘り草臥れた時は、停車場のバーでウキスキー一盞を舉げる。汽車の中に居睡つて、停車場一つ乗り越す位のことには、必ずしも珍しくない。宿では、僕が新聞社へ行くと言つて、毎晩夜深くて歸るのが問題になつて、とうとう夕方から外へ出かけることを、誰彼なしに、『一寸新聞社迄』と言ふことになつた。

### 婚禮とブレイン君

婚禮の式は滞りなくすんだ。

「タイムス」の總取締役ベル君は、満面の笑を傾けて、列み居る人々を見渡して居る。三十分前までは、ミッス、アイリス、メリー、ベルであつたベル君の一女は、今しも何がし夫人となつて、長裾地に曳く純白の装ひ神々しく、香り高き花束片手に、新郎と出で来る。階上階下の來賓は、そろそろと座を立ちかける。此處アナンシエーション教會の中は、暫し身動きもならぬ群集。

僕は、例の大山のゆるぎ出でたやうな大兵肥滿のブレイン君と、右に左に人を避けて、入口に出る。「タイムス」の主筆バックル君が令嬢と出て來るのに會ふ。顔だけは、毎日見知り合つて居る内報部の某君が、夫人の手を携へて出て來る。彼方此方にタイムス、ブック俱樂部で始終顔を見合す美人が大分見える。此等が互に入亂れて挨拶する。軽く目線するがある。手を握るがある。何やら滔々と辯じ立てるがある。ブレイン君は、片



頻に笑を含んだ儘、始終無言で、僕の手を引いてすん／＼と出て行く。

外面には、道の兩側に馬車が一杯。孰れも之から、ベル君の宅のリセプションに向ふ所である。やつと、此處を通り抜けて、クエベックの通りに出ると、ブレイン君は、初めて口を切つて、『變なものぢやないか』と、如何にも變な物らしいことをいふ。何が變だか、僕には分らぬ。

ブ君は、一息ついで、徐々と歩きながら、語り出した。『今迄は娘の身で、親の許に居た者が、結婚の瞬間に、人の妻となつて、今日から他人と一所になる。實に變なものだ。』といふ。夫だけなら、格別變なことも何もない。『見玉へ、會堂の中には、幾百人と集まつてゐるが、夫れが幾百の眼で見居るから變だ』といふ。一向變なことはありやしない。『今迄育て、来た娘を、之から手離さうといふ親の心もある。自分も早くあつなつて見たいと苦勞する娘もある。嬉しさに何もかも忘れた當の新郎新婦もある。此の婚

禮で、いくらか儲ける坊主もある。之を又新聞に書かうといふ新聞記者もある。』といふ。成程、少し變なものになつて来た。ブ君は聲を潜めて、『僕は實の所、まだ結婚したことはないのだ』といふ。成程、夫ならば、婚禮が變な物に見えるのも無理はない。

ブ君は、何う見ても五十をすつと越えて居る。夫が今に獨身である。此の後とても結婚する氣はないさうな。『人間の義務を果さぬといふ非難はあるだらうが、其の代り、僕は他の點で盡すべだきけは盡して、人間相當の務を立派に果して居る積だ。』と、ブ君は何時になく昂然として言つた。女房を持つことだけは、人間の務通りやつて居る人が、随分ある世の中に、僕はブ君の意氣に服せざるを得ない。前のスタインバーグ老人も、或は之と同じ意味の獨身であるかも知れぬ。

兎角して、僕等はベル君の宅へ着いた。來賀の客が、家の外迄溢れて、其の賑しさ一通りでない。ベル君夫婦と新婦とは、目早く僕を見つけて、頻に僕が贈つた七寶燒の禮

日本語の「君が代」  
をいふ。

### 日本語の「君が代」

マンション、ハウスの伏見宮殿下歡迎式場で、ヨーク公陸軍幼年學校の生徒三十餘名が、日本語で君が代を歌つた。其の發音といひ、調子といひ、寸分日本人と變らぬのみか、其のたツぷりとゆとりのある聲で、落つて歌つた所は、能く日本でやる甲走つた聲で、さよろ／＼とやつて仕舞ふのとは、大分違ふ。之には、列席の内外人共に齊しく感心したのであるが、僕等は感心と同時に、此の遠い／＼外國で、故國の言葉が歌はれたのを聞いて、何とも言へぬ懐しさを感じた。英吉利人が日本に來たなら、到る處に英語が聞かれる。「お早う」「お休み」「お休み」位の英語なら、大抵の小學生徒は皆な知つて居る。日本人の英吉利に來た時は、なか／＼さう行かない。苟も日英同盟など、稱へて、兩國

の和親を計らうとするなら、英吉利人も、ちと「お早う」「お休み」位の日本語は心得て置いて貰ひたいものだ。ホテルの喫煙室とか、公園のベンチとかで、突然見知らずの人から、日本語で挨拶せられたら、誰だつても、日本人なら嬉しいと思ふに相違あるまいと、僕は考へた。

或日「クロニクル」の元從軍記者であつたリンチ君に招かれて、サベージ俱樂部の午餐に行つた時、ふとブレイン君に會つて、此の事を話し出すと、ブ君大に賛成して、是非其の意味の投書を「タイムス」に出せといふ。今此處で書くなら、僕が持つて行つてやうと迄言ふ。此に於て、テームスの河面を見渡した俱樂部の三階の讀書室で、僕は筆を取り始めた。ブ君は側に居つて、例の片眼鏡越しに覗き込みながら、そんな字をそんな處へ使つては行かぬといふ。斯いふ風に言つた方がよくはないかと、時々言つて呉れる。元來ブ君は名だゝる語學者で、佛蘭西語にかけては「タイムス」社中に一二を争ふ位。又

英吉利の古文學にも造詣淺からぬ人で、新聞記者仲間でも評判の文章家である。ブ君はいつも、今の新聞記者が動もすれば拙速主義を是れ事として、生硬な熟語を使つたり、確と當嵌らぬ文句を用ひて、いきなり千萬な文を綴るのを、此の上もない苦々しいと心得て居る。世の中に我が思ふ通りを、しつかりと寸分の違ひなく言ひ表す言葉を見つけた時ほど、愉快なことはないと、ブ君は能く言つて居る。僕が「たッぷりとしたゆとりのある聲」といふのを譯し兼ねて、彼れもいけず、此も面白からずと考へに沈んだ時、僕の意味を十分に聴いた上、此の大兵肥満のブ君は、唯此の一兩語の爲に、眼閉をち口を噤んで、長い間考へて呉れた位である。ブ君は、「タイムス」の外勤主任で、日本ならば、探訪の親方といふ所。其れが此だ。

だから、社中でも、ブ君の重んぜられることは一通でない。ブ君はたび筆を提げて其の所謂「探訪」に出かけると、其の堂々たる風采といひ、其の温乎たる調子といひ、而し

て外には知れぬが、其の胸に藏する萬巻の蘊蓄といひ、遙に衆同業を抜いて出て居る。停車場に宮殿下を迎へた時にも、マンション、ハウスに歓迎の式に列した時でも、氣のせいか、此の人に依つて、わが親愛なる「タイムス」は、慥に他社を壓して見えるやうに思つた。

漸くにして、此の二人が、りの投書が出来上る。ブ君は讀んで見て、好矣々々と言ふ。其處へ、リンチ君が来て、一體人の客を捉へて、何をして居たのだと言つて笑ふ。文は五月十三日の倫敦タイムスに出て居る。曰く、

TO THE EDITOR OF THE TIMES.

Sir,—Will you permit me, as a Japanese present at the Guildhall yesterday, when an address was presented to his Imperial Highness Prince Fushimi, to express the pleasure which was experienced by all Japanese at the singing of their national anthem by the boys of the Duke of York's School. It was an agreeable surprise to the Japanese in the audience to hear the familiar strains of their own national anthem sung by English boys, and still more was it surprising to them that the boys should be able to sing the Japanese words with distinctness and purity of pronunciation. The voices of these

日本語の「君が代」

boys are fuller than those of our Japanese children at home, and the effect of their singing was therefore richer, and, I may say, even more pleasing to a Japanese ear than the native rendering of the anthem.

May I add that we Japanese were all touched by hearing our much-loved anthem sung so far away from home, for there is nothing more moving than to hear one's own language spoken in a distant foreign land? And now that the boys of the Duke of York's School have proved conclusively that English tongues can frame the accents of the Japanese language, would it not be a happy idea, and calculated to strengthen the sympathy already existing between our two allied nations, if English boys and girls were taught at least some simple phrases in Japanese? If English people could merely say to Japanese visitors to England "Good morning," "Good-bye," "How do you do?" in Japanese, this little attention would be very highly appreciated and do create friendship between the people of the two countries. I may add that almost every child in our Japanese schools can utter these salutations in English.

Yours truly,

K. SUGIMURA, Correspondent, Tokyo Asahi, 68, Cornwall Road, South Kensington, May 11.

倫 敦 小 品

此の投書が「タイムズ」に現はれて後、間もなく「メール」の時と同じやうに、僕はさまざまの書面を其の讀者から受取つた。先づ之に就ての批評は申す迄もなく、「君が代」の文句を教へて呉れといふがある。其の英譯を聞きたいといふがある。音譜の書いたもの

大 英 遊 記

がないかとお尋ねがある。「お早う」、「お休み」の日本語は何ういふのかといふがある。中には、僕を音楽に精通した者とも考へたものか、ジエンキンス嬢の芬蘭 瑞曲 音楽の講演會、ユナイテット、アーツ倶楽部の合奏會、マダム、ヒルデブランドの獨唱會の案内などもあつた。

當のヨーク公陸軍幼年學校の校長マレー大佐からは、早速鄭重な禮狀が來た。之と同時に、「近日、當校へ西大將の臨場を仰ぐ積であるが、其の節は何とか少し奇抜なことをやつて見たいから、先づ生徒一同に聲を合せて、グード、モーニングを日本語で言はせ、夫から生徒總代を選んで「閣下の來校が當校及生徒一同の光榮とする所である」旨日本語で謝辭を述べさせやうと思つて居る。汝は夫に就て何を考へなすか」とやつて來た。

成程、西大將の姿が見えると同時に、校長が一令の下に、「一二の三つか何かで、一同聲を合せて「お早う」とでも怒鳴りつけたら、此の勇敢なる日本の大將をさへも面喰は

日本語の「君が代」

日本語の「君が代」

一五〇

すべく十分に奇抜であることを、私は確かめてある。併しながら、之は實行すべく、餘りに奇妙である。有り體に言ふ所で、私は賛成しなすぬ。其處で、僕は早速之に答へて、何も「お早う」の一齊射撃は、日本でも聞いたことはないから、ちと變だらうと思ふが、挨拶を日本語でやる方は、至極結構であるから、若しお望とあらば、生徒一兩名僕の所へよこされたら、西大將には内々で、日本語の發音や調子を御傳授申さうと言ひ送つた。大佐からは之に對しても、丁寧な返事が來て、西大將の事愈確定したら、是非日本語の口傳を頼みたいとのと、及暇があらば一度僕にも學校へ來て見て呉れぬかとのことを書いて、更に一轉して日英同盟に及び、「余は熱心に日英同盟の長へに續かんことを希望する者なり。此の同盟の續かん限りは、日本も、英國も、又他に如何の同盟をも求めるの必要なるべし。」云々とあつた。但し日が無かつたので、僕も行かず、先方も來なかつたが、其の後維也納で、西大將の一行に邂逅つて、此の事を話したら、大將も夫は面

白かつたらうとの仰であつた。

此の投書以來、例のブレイン君が僕の所へおこす手紙は、必ず「イカガデスカ」で初まつて、「サヨナラ」で結ぶことになつた。或日ピクトリアの通りで、ブ君に會つた時、面白くことがあると言ふので、何事かと思つて聞いて居ると、ブ君の従妹と云ふ、頻に日本語を知りたいといふので、ブ君は其のなげなしの臍線の中から「お休み」一つ放へて呉れた。(斷つておきが、ブ君は總計四つしか知らぬのだ)所が、此の従妹が、ヘスチングスへ避暑中、或朝海岸を散歩すると、日本の女に出逢つたので、早速「お休み」とやつた。其の意が先方に通じたと見えて、其の女が莞爾と笑つたとかいふので、従妹先生大得意で、其の由こまゝと手紙に書いて來たとのことであつた。朝ッばらからの「お休み」では、いくら暢氣なヘスチングスの海岸だつて、面喰つたに相違ない。

日本語の「君が代」

一五一

### アールスコートの日本村

倫敦の西南隅、アールスコートの地に一區を畫して、通稱アールスコート博覽會と稱へられて居る者がある。倫敦博覽會社ロンドン博覽會社の經營する所に係り、主として世界各國の製造工業乃至風俗習慣を一般に紹介するを目的とし、年々仕組を取り代へて、或は印度博覽會インド博覽會、或は伊太利博覽會伊太利博覽會といふ風に、一國々々づゝ開いて居る。設立以來既に十三年を経過し、今後尙三十五年間の土地使用權を持つて居るといふ。

今年此處で開いたのは、バルカン半島博覽會といふので、本館には土耳其を初め、ルーマニア、セルビア、ボスニア、ブルゲリヤ等の工藝品を陳列し、此等諸國の土人を雇ひ來つて、其の執業の模様を示し、館外の廣庭には、半島の勝地をパノラマ式の畫割に見せ、バルカン風の喫茶店賣店を處々に仕つらへて、如何にも土耳其附近の實景が斯な

でもあらうかと想はしむる様に出來て居る。此の外に尙餘興として、音樂堂、飲食店、舞踏場、輕業、手品、船滑り、隧道くゞり、空中回轉機はいふに及ばず、手相人相の占ひ、エツキス光線、早取寫眞、その他、千種萬様種々雜多のものが有つて、風涼しき六月の日暮方には、ぞろ／＼と繰出す人の數、賑しなると言ふ許りでない。

所で、此の今年のバルカン半島博覽會をして、更に一段の光彩を添へしめた一大餘興が、此の外に有つた。夫は外でもない。本館の西北隅に出來たさ、やかな日本村で、之が何よりも、かよりも、今年の博覽會の第一の呼物となつたのである。

稱して日本村といふものゝ入口は、會館の内に別にある。中は一切パノラマ風に、屋根も周圍も盡く淺黄色のキャンバスを一面に覆ひ、光は晝間でも電燈に依ることゝし、四圍のキャンバスには、遠見の日光や富士を畫いて、夫が實物の家の垣根や石段と續いた具合、頗る能く出來て居る。日本家屋は二十三軒、平屋もあれば、二階屋もある。各戸

孰も紅提灯を軒に吊して、左ながら下手なお祭でも見るやうな。扇子、七寶焼、竹細工、段通織、漆器、陶器、指物、其の外色々あるが、孰も日本から連れて来た職工が、押ッ開いた日本流の店頭で、仕事をして見せるので、人目を惹くこと夥しい。賣店も二三軒あつて、之には英吉利の婦人が店番をして居る。村の中央に、朱塗の大鳥居が立つて、之を潜ると東照宮の様な社がある。其の後は、千秋の雪を戴いた富士の峰を見上げる。此の邊には、模造の櫻や梅が一面に立ち列んで、夫が電氣燈に映じて、左ながらの花ざかり。社の脇に池があつて、模造の蓮花今を盛りと咲き亂れ、其の上に太鼓橋が架つてある。橋を渡つて突き當ると、二階建の茶店がある。軒端には、例の通り球燈を吊して、二階の縁端で時々日本の女が三味を引く。茶店の女は、日本人の渡來が許されなかつた爲、英吉利の女を使つて居る。此等がだらしく日本服を着流して、靴ばきか何かで、よこ／＼やつて居る所は、餘り體裁のよい者ではないが、夫でも見物のお客には大受け

であるから、可笑しい。若し、新橋邊の阿嬌を之に扮して、赤前垂赤袴の姿りしく給仕に出したら、夫こそ倫敦市中の大評判になつたに相違ない。此の外、輕業師の一组が村の一隅に舞臺を構へて、鞠の綾取り、劍渡り、梯子登り、獨樂回しを演じて居る。口上言が拍子木叩いて、『之より御覽に入れまするは』などと、日本語でやる所は、頗る滑稽で、吹き出さずに居られぬ。

近來、何につけ角につけ、日本の物とさへ言へば、珍重せられる世の中とて、此の日本村が一たび開かるゝや、新聞紙上の評判に促されて、見に行く男女引きも切らぬ。午後一時から夜の十時までは、輕業小屋の前、陶器師提灯屋七寶焼の店頭など、丸で人の山だ。故郷を隔つること何千里の空で、偶本國の人ばかり集つた一小村があると聞くと、何とやら懐しいので、僕も前後通じて五回はかり、此の博覽會に出かけた。

餘計なことをと謂ふこと勿れ、其の五回出かけた間に、是非ともわが本國の同胞に報

アールスコートの日本村  
せざるを得ぬことが出来た。

僕が初めて、此のアールスコートに行つた時、兎ある店頭で、居合せた三四人の日本の職工と話し合つて見ると、一同は孰も大不平をこぼして居る。理由を聞くと、日本出發前の約束と來着後の待遇とに、非常の相違があつて、不平で堪らぬが、間に立つた通辯が、十分に此方の意思を通じては呉れず、職人の方に英語の分るものとはなし、已むを得ず一同申合せて、ストライキでもやらうかとの相談中だとのことであつた。僕は立入つた話だが委しく事情を知らせて呉れたら、模様によつては一臂の力を添へまいものでもないと言つた所、一同大に喜んで、僕を其の合宿所に連れて行つて、大工の熊さんやら、瀬戸物屋の勘公、提灯屋のブラ藏君杯いふ手合が、僕を取り巻いて、彼一句此一句の長物語。いや船中の待遇が悪かつたの、マルセーニから汽車中で一日飯を食はなかつたの、來て見て日本食が食へぬの、博覽會では内職が出来ぬのと、散々の御託を列

べたが、中にも不平の最も甚だしいのは、雇入れ契約の當時、一同の仕事は工場内でやるのであつて、決して斯な所で輕業師など、一所に、見世物同様の仕事をするのではなかつた。

僕は、元來ストライキが大好きで、學校に居る中にも、屢一方の旗頭を承つたことがある。天外萬里の異境に、我が六七十の同胞が虐待せられて居ると聞けば、如何にしても我慢がならぬ。僕も一つ山田長政の向ふを張る氣で、アールスコートの大將となつて見やうかと考へたが、待て、當初の契約書なるものを見した上でなければ、うかと名のない戦争は出来ぬと、先づ其の所謂契約書を出させて讀んで見た。

讀んで見ると、職人側の理窟は一として立たぬ。契約の上からいへば、正面會社に對しては、一言も言へぬことになつて居る。職人共が、彼もあらう、此もあらうと、楽しんで待ち構へて居たことは、盡く中に立つた周旋人が、出鱈目の仲人口に過ぎない。殊



に可笑しいのは、當日第一の問題となつた「見世物同様に扱はるゝ」との一儀で、之は契約書中に日本語で

雇人は服務場に於て常に雇主又は其代理人より時々發したる命令及諸規則に隨ひ其服務時間及「他の委細に關しては必ず雇主の指示又は承認の通り働作を爲すべし」を契約す云々

とあつて、所謂「服務場」の解釋如何に依つては、如何にも工場ばかりで執務することも取れる。所が契約の正文なる英文を讀んで見ると。

"The employee agrees that he or she will at all times work at the place or places as the Employer may direct and comply as regards working hour and all other incidents of the service to be performed by him or her with the orders rules and regulations that may be given or made from time to time by the Employer or his Representative."

とある。之を文字通りに譯して見ると、

雇人は常に雇主が命すべき一箇所又は數箇所に於て、執務すべし。又労働時間及雇人が行ふべき服務上の一切の事件に關しては、雇主又は其代理人が時々發すべき命令規則に服従すべし。

といふことで殆ど日本文とは似ても似つかぬ原文である上に、執務の場所は、明かに何處でも構はぬことになつて居る。確と英文の讀めぬ者が will と times と direct と comply と lim or her との處をコママで切るべきを誤つて、盲滅法界に翻譯したものに相違ない。之では、僕もアールスコートの大将になりやうがない。

此に於て、僕は先づ一同に向つて、其の心得違なる由を説き、彼等の不平は、畢竟彼等の英語を知らぬに乗じて、周旋人が宜加減に誑したに過ぎぬのであつて、落度は雙方にあるから、今更事を荒立てゝは、益損の上塗をすることになるとの事を、懇々と説いた。而して、此の上の善後策としては、唯然るべき人を介して、誤解の事情を詳陳

アールスコートの日本村

一六〇

して、會社に泣きつくより外に仕方があるまいとのことを附加へて置いたのである。

二度目に行つた時、其の後の模様を聞いて見たら、ストライキは見合せて、會社へ事情を陳べたところ、會社でも氣の毒に思つて、今更給料としては上げられぬが、煙草代として一箇月十志づつ、増給することになつたといふ。

三度目に行つたら、愈日本から米味噌醤油などが着いて、食事は一切日本食になつたといふ。

四度目に行つたら、銘々の店頭で勝手に物を賣らせては、軒別に營業税を課せらるゝ恐れがあるから、職人が執務時間外に内職に製造した品物は、別に賣店を設けて賣らせることになつたといふ。

五度目に行つた時は、前日ハムブトン、コートの御苑で一同に出會つたことを思ひ出して、何してあんな所に行つたかと聞くと、會社の方で、近頃日曜の休日毎に、倫敦の

各名所に一同を案内して呉れるので、昨日はハムブトン、コートからキュー、ガーデンの方迄遊びに行つたとのことを語つて、一同大悦びの體であつた。流石に英吉利の大會社だけに早速待遇を改めて呉れたから宜かつたものゝ、さもなければ、一同不快の裏に三四箇月を送らなければならなかつたのである。

僕が倫敦を出發する時、友人の見送りは前以て盡く断つて置いたが、唯一人羽織袴で態々ピクトリア停車場迄見送りに來て呉れた人がある。僕は千百の車馬を連ねた王侯將相の見送りよりも、此の一人の見送りを心から辱なく思つた。見送人の名は神樂某、アールスコートの陶器師で、京都の人。

# 倫敦の下宿

## 下宿さがし

倫敦では、少し落ちついて、仕事を考える考へがあつたから、着いた翌日、直ぐ下宿をさがすことになつた。何分不案内も不案内、西東どころか、悪くすると、夜盡も分り兼ねる位の不案内の土地のことゝて、何處を何う探して宜いのか一向分らず。兎も角もと、此の由初對面の坂田總領事に話せば、そんなら僕が一所に行つて探してやらうと、氣輕に言つて呉れたので、二人で馬車を飛ばせて、彼地此地大分駆け回つた。彼此二三時間も探して見たが、一向思はしい奴が見つからぬので、一旦坂田君と別れて、後は更に其の紹介で、大使館の小村書記生の宿を尋ねた。會つて仔細を話すと、今度は、小村君

が一所に行つて呉れることになつた。孰も皆なかく氣輕だ。

日本ならば、森河町か神保町邊の、軒並に列んだ下宿營業の看板を目的に、明間がないかと聞いて歩く所だが、此處では、大抵素人屋同様の家造りとして、一寸通りかゝつた許りでは知れぬ。先づ「テレグラフ」か何かの廣告で、大凡見當をつけて置いた上で、此處ならばと言ふ所を尋ねに行く。時々下宿屋でも何でもない家へ飛び込んで、お生憎様を喰つたこともある。之に懲りて、其の次には入ると直ぐ、お宅は下宿屋かと聞くと、下宿屋ではないがプライベート、ホテルだとか、又はファミリー、ホテルだとかいふ。つまりは同じことでありながら、唯少し上等ぶつて、態々下宿屋顔をしまいとす。何處の國にも、「ふる」ものと「顔をする」者とはある。

さる所に往く。主婦が出て来て、滔々と味噌を捏ねる。先づ、宅には大きな庭がある、音楽に堪能なレデー客がある、同宿は身分のよい人ばかりで、料理は非常に旨い、此の

營業を始めてから何十年とかなる、取引銀行は何處其處であるから、念の爲に聞いて呉れなどいふ。小村君は、僕の方を向いて、大きな聲で、「斯なことを列へ立てる家に殊なはないものだ」と言ふ。念の爲に、上に乗つて見ると、成程むさくるしい。其の所謂レー客といふのだらう、顔の青いひよろ長い神經質らしい女が出て来た。庭はと見ると、宅のでも何でも無い。街道一つ隔て、彼方に在る小さな公園をいふのだ。成程ガーデンには相違ない。此の調子では、取引銀行といふのも何の取引だか知れたものぢやない。僕等は這々の體で逃げ出した。

中には、随分無愛想な奴があつて、案内を求めると、「室はあるが、宿料は之々であるから、夫でも宜いなら、お見せ申さう」などいふ。さうかと思ふと、宅には生憎空室がないが、隣を聞いて見てやらうと、主婦が態々出かけて呉れるやうな親切なものもあつた。又或所では三四軒殆んど軒並に、にべもなく断られた。何ういふ理由だか、一向分

らなかつたが、其の後聞くと、何でも印度人が、つい近頃此の邊で喰迷をしたとかで、其の以來亞細亞人に對しては、殊に警戒して居るとのことであつた。足一度海外に出ると、何でも無い一個人が直ぐ、一國を代表する譯になる。一國だけなら宜いが、此奴は亞細亞全洲を代表させられて居る。怪しからぬことだ。

彼もいけず、此も氣に入らず、色々素見し歩いた揚句、とう／＼南ケンジントンの博物館の側で、小奇麗なブライベート、ホテルを見つけた。寢室は四階の小さい部屋だが、夜具調度孰も小ざつぱりとして、夫に食堂應接室喫煙室などは頗る堂々たるものであつた。出て来た主婦も、穩かな女らしい。此處ならば、先づ何なお客が來ても格別耻かしくあるまいと、小村君がいふので、遂に之に決した。宿料は一週三ギニー。日本に直すと、一日四圓五十錢に當る。

其の夕、直ぐホテルから引移つた。

下宿の一日

衣物を入れる箆笥がある。顔を洗ふ手水臺がある。寢臺がある。暖爐がある。大きな卓子がある。椅子が二脚ある。夫にトランクやら、革囊やら、帽子函やらが轉つて居て、僕の小さな室は、殆ど足の踏入れ所もない。窓をしめておけば、何だか押し詰まるやうな気がする。さればとして、之を明けければ、外の馬車自動車の音が喧しくて、其の上に細かな油煙が入つて来る。倫敦の油煙と來ては、此の、日本なら先づ番町邊と言つた様な所で、而も終日窓を閉めて置いてさへ、猶且何處からともなく入つて來て、夕方には卓子の上がざらざらになる。少し出歩けば、襟は半日で黒くなり、顔一面何だかもやもやとした感じがする。如何な不性者の僕でも、一日に四五度は必ず手先を洗つたものだ。やれ〜氣持の悪い。

僕の室附の女中は、ベチーと言つて、溫和しい可愛らしい女であつた。可愛らしいと言ふと、何だか小さいやうに聞えるが、五尺七寸二分の僕が見て、格別低いと思はなかつたから、五尺三四寸はあつたに相違ない。何でも、英吉利では、近來男が次第に小さくなつて、女が段々大きくなる傾があるさうな。之れはレミンTONの老人が、屢僕に語つた所である、成程さう聞いて見ると、僕など、すれ〜位の女がいくらも有つた。日本でも、近頃此の傾が餘程あると聞いて居る。ベチーは、口數の少い、滅多に笑はぬ、而して極めてきちやうめんな丁寧な女であつた。尤も英吉利の女中には、能くそんなのがあるといふ。滔々たる日本の下宿屋の女中の、おしやべりにして且つだらしのないのとは、大分どんがらがんが違ふ。

朝の八時には、女中が湯を持つて、起しに來る。こつ／＼と戸を敲いて、中で返事を  
する迄は、何時迄も敲いて居るから、忌でも起きざるを得ぬ。夫から髭を剃る、顔を洗

下宿の一日

衣物を入れる箆筒がある。顔を洗ふ手水臺がある。寢臺がある。暖爐がある、大きな卓子がある、椅子が二脚ある。夫にトランクやら、革囊やら、帽子函やらが轉つて居て、僕の小さな室は、殆ど足の踏入れ所もない。窓をしめておけば、何だか押し詰まるやうな気がする。さればとて、之を明けければ、外の馬車自動車の音が喧しくて、其の上に細かな油煙が入つて来る。倫敦の油煙と來ては、此の、日本なら先づ番町邊と言つた様な所で、而も終日窓を閉めて置いてさへ、猶且何處からともなく入つて來て、夕方には卓子の上がざらざらになる。少し出歩けば、襟は半日で黒くなり、顔一面何だかもやもやとした感じがする。如何な不性者の僕でも、一日に四五度は必ず手先を洗つたものだ。やれ〜氣持の悪い。

僕の室附の女中は、ベチーと言つて、溫和しい可愛らしい女であつた。可愛らしいと言ふと、何だか小さいやうに聞えるが、五尺七寸二分の僕が見て、格別低いと思はなかつたから、五尺三四寸はあつたに相違ない。何でも、英吉利では、近來男が次第に小さくなつて、女が段々大きくなる傾があるさうな。之れはレミントンの老人が、屢僕に語つた所である、成程さう聞いて見ると、僕などゝすれ〜位の女がいくらかも有つた。日本でも、近頃此の傾が餘程あると聞いて居る。ベチーは、口數の少い、滅多に笑はぬ、而して極めてきちやうめんな丁寧な女であつた。尤も英吉利の女中には、能くそんなのがあるといふ。滔々たる日本の下宿屋の女中の、おしやべりにして且つだらしのないのとは、大分どんがらがんが違ふ。

朝の八時には、女中が湯を持つて、起しに來る。こつ〜と戸を敲いて、中で返事をする迄は、何時迄も敲いて居るから、忌でも起きざるを得ぬ。夫から髭を剃る、顔を洗

ふ、衣物を着替へる。太夫身仕度な調つて、下の食堂に下るのが先づ九時頃。卓子の上には、新聞や手紙が来て居る。之を読みながら、朝飯をすませて後、さて自分の部屋へ歸つて見ると、ちやんと室の掃除が出来て居る。

之から今見た手紙の返事を書く。此處へ来てから、何處へ手紙を出しても、必ず一々叮嚀に返事が来るから、僕も自然と之に化せられて、何んな手紙にも、何とか挨拶せずには置かぬことゝ定めたり。下手な英文で、十餘通も手紙を書くのは、誠に人知れぬ苦勞である。手紙がすむと、本社に送る原稿を書く。

午後一時半に銅鑼が鳴つて、晝飯の卓子に就く。晝飯は外ですます人が多いので、食事を共にする人は、極めて少い。午後は、大抵外に出る。四時半に、又銅鑼が鳴つて、今度はお茶が應接間である。六時半に、又銅鑼が鳴る、晚餐の仕度である。之を聞くと又髭を剃り、髪を梳り、手水を使つて、七時の銅鑼を合圖に、一同食堂へ練り込む。

愈々晚餐だ。

面倒臭いが、晚餐には一同盛装して出るから、僕も已むを得ず燕尾服で出かける。此の時は外出の客も皆歸つて、大分賑はしい。普通の下宿では、大きな卓子を取り圍んで、主婦が其の端に坐るのだが、此處は下宿屋でなくて、高等御下宿といふのだから、廣い食堂に三四人宛で、彼方此方に在る卓子を取り巻くのである。初の間こそ、僕も小くなつて居たが、追々日數が立つに連れて、大分知り合も出来て、卓子を隔て、互に冗談を言ひ交すやうになつた。偶お客の中に、氣輕な老人などが居て、少し聲高に何か辯じ出すと、忽ち話が夫から夫へと進んで、一座太陽氣になることがある。

晚餐がすむと、女は大抵應接の間に集る。男は其の隣の喫煙室に引き退る。別にさう定められた譯ではないが、應接の間が婦人の占領となると、何だか窮屈なものを見せて、隔ての戸を明けて置きながら、男は多く喫煙室に集まる。之を下宿の主人に尋ねたら、

親父は「喫煙室なら煙草も吸へる、雑誌も出来る。應接の間に至つては」と言ひながら、忽ち首を傾けて、肩を一寸ゆすり上げて、兩手をぱつと擦げた。之は頗る便利な挨拶で、日本でこそ、誰もやつては見ぬが、歐羅巴でも亞米利加でも、之ばかりは何處へ行つても通用する。通用はするが、さて何んな意味だと聞かれると、明かには誰も返事が出来ぬ。其の便利な所以は此處に在る。

喫煙室の話が段々はづんで来て、追々高笑の聲でも洩れて来ると、應接間の婦人連迄が次第に釣り込まれて、やつて来るが、大抵は應接間の方で弾出すピアノに應せられて、終には段々其の方へ引きつけられる。ピアノを遠巻にして、銘々長椅子に凭つて且つ語り且つ聴く。下宿の最も楽しいのは此の時である。

其の中外に出る者もある、臥床に入る者もあつて、十一時過には灯を消して仕舞ふ。

女のお客

或朝僕の室の前で、くすくすと女の笑ふ聲がする。

此處の女中は、滅多にこんな所で笑はぬから、誰だらうかと思つて、潜と戸を開けて見ると、若いのとやゝ年を取つたのが、まだ頻にくすくすと笑つて居て、僕の顔を見ると均しく、若い方はふつと噴き出した。年の取つた方は、口へ手を宛てゝ、やつと吹き出したいのを我慢して居るといふ様な顔で、頻に一人を制して居る。

二人とも知合の客である。若いのはコムヘアと言つて、僕と同じ食卓で、毎日向ひ合せになる娘の年を取つたのは、いつも食堂の隅の方に、唯一人陣どつて、時々目をぱちくりさせて、僕を笑はせる何處かの老夫人である。名前は知らぬが、顔は能く知つて居る。全體二人は、何で斯んな所へ笑ひに来たか、僕には頓と合點が行かぬ。



頓てコムペア嬢から先口を切つた。「メール」に出て居る僕の投書は、何時迄續くのかと聞く。僕は七日の間書く約束だから、まだ二三日は續く積と答へる。老夫人は深い溜息を吐いて居る。「嬢は一寸其方をふり向いた後、此の方の事もお書きになる積か」と尋ねる。僕は無論そんなことを書く考へはないが、全體何故又そんなことを尋ねるのか、一向分らぬ。如何に禪學の流行る今日だからとて、まさか英吉利の女が二人がゝりて、問答に來た譯ではあるまい。

彼も聞き、斯も聞いた揚句、漸く此處迄二人がゝりて笑ひに來た事情が分つた。實は僕が此の宿へ來て以來、折悪しく此の老夫人が喪衣の儘で便所へ行く所を、二度見つけたことがある。一體喪衣の儘で廊下へ出るのは朝早くか、又は夜遅く、人の居ない頃を見計つて竊に行くべきものである上、通例の服装で居てさへ、便所の出入は、成るべく人の通らぬ時を選ぶのが、習慣に成つて居る。夫を老夫人が毎日の朝寝のお蔭で、ばツ

たりと二度迄も廊下で行き會つたのだから、内心甚だ穩かでなかつた。折も折、今日の「メール」を見ると、大分英吉利の婦人の悪口が出て居るので、此奴同じ槍玉に上げられては大變だといふことになつて、急に僕とは一番近い所へ坐るコムペア嬢を連出して、何か此の事だけは、新聞に書かぬやうと頼みに來たのだといふ。あほらしい。此に於て、僕は斯う見えても、そんな人の悪いことをするものでないとのことを、合點の行くやうに説いて聞かせたので、夫人は初めて胸なで下して、「之からは安心して夜も能く寝られます」と言つた。まだ彼の上に寝る積と見える。

之で二人は又笑ひながら、何處かへ行つて仕舞つたが、實の所、新聞の記事には、老夫夫人よりも、コムペア嬢の方があわてた者らしい。後で主婦から聞いた話だが、僕の投書の中に、婦人の服装を評した所で、晩餐會の席などでは、時々べらぼうに大きな帽子を被つて、卓子に就く婦人であるので、之が少し皿の上へ俯きかゝると、往々其の大き

な帽子につけた鳥の羽が、あはや前に坐つたお客の鼻柱に觸らうとすることがあると書いてある。之は必定毎日食卓を共にするコムベア嬢のことなんめり、嬢自身大に狼狽して、其の以來一切帽子に羽はつけぬ事としたといふ。

さういふ話をした主婦自身も、僕が英吉利の室内の裝飾が餘りこてくして居るのを罵り、日本なら大座敷に精々二つ三つの額か掛物しか置かぬ所を、英國では用もなき悪畫を十も十五も吊し列べると書いたのを讀んで、早々下女に内命を下して、僕の室に何な畫が幾何掛つて居るか見に来させたまうた。

其の外にまだある。僕は芝居に行く、前の列の女が大きな帽子を高々と被つて、遠慮會釋なく右左に動き回るので、一尺の帽子が三尺の幅を取つて、芝居が能くも見られなかつたと書いた。之を讀んで或る夫人が晚餐の後、僕の側へやつて来て、若い女なら宜いが、我々程に年を取ると、毛が少くなつて帽子一つ被るにも、何本とやらのピンで

向ひ合せのお客

横からも縦からもつき留めなければならぬから、之を體裁よく被るには、中々骨が折れる。夫を芝居の出入毎に取らせられては、堪るものでない。若い女だけに脱がせたら宜からうといふ仰であつた。

悪氣のあつた譯ではないが、僕の投書は此の宿中の女客に、一方ならぬ恐慌を與へたものと見える。

宿へ来た二三日は、せうことなしに食堂の真中の卓子で、唯一人ぼつねんと食事をして居た。一人では淋しからうから、誰か言葉敵になりさうな若いレデーが来れば宜いが、など、主婦も言つて居たが、間もなく前に出たコムベア嬢が、巴里から着いて、僕と同じ卓子に坐ることゝなつた。嬢は年の頃二十五六か夫とも三十以上にもなるか、品の

向ひ合せのお客  
一七六  
好い静な人で、勝れて美人といふではないが、決して醜い方ではない。何でも醫學修行の爲に巴里に出て居て、つい近頃歸つたとか言ふので、佛蘭西語も自由に話すし、言葉使ひも身の取做も賤しくは見えぬ。毎日三度々々顔を合せることゝて、まさか睨めくら許りもして居られず、いつしか、先方は日本の事など聞き出す、此方からは手紙の分らぬ所や、町の名の知れぬ所などを尋ね合ふのから始まつて、段々いろんな話をする様になつた。

所が、コ嬢は二週間ほど立つと、又もや巴里に出立して仕舞つて、其の後へビー夫人といふのがやつて来た。年は五十に程近い人で、額には小皺もある。人を鼻の先で遇つた様な言葉を使つて、いやにちんと濟まして居る。之が又恐ろしいおしやれで、晚餐の時などには、金剛石入りの指輪を五つも嵌めて、こてと白粉を塗つて、腋臭と共に香水をぶんく香はせて、而してローブ、デコルテか何かを着て、しやならく、とやつて來

る。話をすると、二言目には、「自分の夫が何の彼のと言ふのが癖で、其の所謂「自分の夫になるものは、陸軍の少佐だか中佐だかださうなが、左ながら二人で倫敦の交際社會を切り廻して居るやうなことを言つて居る。夫程大事な夫なら、始終側にへたばり附いて居さうなものだが、一月も二月も下宿に住まつて、芝居や寄席ちやと出歩いて許り居る。晚餐がすむと、同勢を募つて、ブリツヂをやつては、何志勝つたとか負けたとかいふ。

動もすれば、お國自慢をする。英吉利人は、誰も彼も國自慢をする者だが、此の女のは殊に甚しい。時には知りもしない他國へ迄切り込んで来て、日本を丸で子供扱ひにすることがある。何かの話の次手に、日本に燕麥があると云つたら、燕麥は牛の食ふ物だといふ、そんなら、オート、ミールは何で作るのかと聞いたら、婆様一向知らぬ。又日本のは幣は、今でも人間の骨で作るのかと聞くから、僕は忌々しさに新録の五十錢銀貨

向ひ合せのお客

21.8

向ひ合せのお客

一七八

を投げ出して見せてやつたら、奇麗だから呉れといふ。英蘭銀行の紙幣といふは、有名な汚いものだが、彼を世界第一の奇麗な紙幣だといふから、僕は日本の紙幣などは彼なにびり／＼と引裂ける様な紙ぢやないと言つてやつた。すると、英國の紙幣は、孰も一度使用する切りで、一度銀行の手へ戻れば、新しくあらうが何だらうが、其の儘決して二度と外へは出さぬから、日本の様な堅い紙を使つて、手垢で汚れる迄裂けぬ様にする必要はないと云ふ。之には僕も一本參つた。成程、英吉利の紙幣の汚れたのは見たことがない。

何かの次に、談偶英吉利の歴史に及んで、婆様、頻りに例の國自慢をやるから、僕も遂に堪へ兼ねて、爆裂弾を投げた。成程、英吉利は、今でこそ世界一の立派な國として僕は中心から尊敬もして居るが、歴史を洗ひ立てれば、ブロン人の昔から今日に至る迄、引續いて外國に征服せられた歴史ばかりでないか。デーンズが来る。サキソン

が来る。ノルマンが来る。来る毎に、新しい奴に征服せられてばかり居る。憚りながら日本の歴史には、二千五百有餘年間、一回も外國の征服を受けたことはない。も一つ憚りながら、日本にはキング、ジョンもなければ、ヘンリー八世もなければ、チャールズ一世もない、ジェームス二世もない。人皇百何十代の間盡く是れアルフレッドの様な人ばかり。とやつてやりまくつた。其の時は、婆様、尙かにかくと争つて見たが、其の以來餘り日本の悪口は言はなくなつた。僕も其の時は格別深くも考へずに言つてのけたのであつたが、後から思ふと、外の事なら兎に角、歴史だけは成程日本のが儘に世界第一である。

相手は流石に交際慣れて居るだけあつて、議論はしても、格別悪い顔もせず、顔を合す時は、平生通り快く話しもし笑ひもした。之が又何だか侮られた様な氣がして、僕は癩に觸つて堪らない。とう／＼息抜かせにレミントンへ飛んで行つたが、五日経つて還

向ひ合せのお客

一七九